

# 戦中・戦後における「大日本報徳社」の 甘藷増産活動に関する研究(2)

## —『丸山方作日記』『河井弥八日記』の分析を中心に— (その1)

前 田 寿 紀

### VIII. 河井弥八の生涯と甘藷増産活動

次に、河井弥八の生涯と甘藷増産活動をみてみよう。

#### 1. 河井弥八の生涯

##### (1) 出生と祖父、父等の影響

河井弥八（以下、河井と略称）は、明治10年10月24日、静岡県佐野郡上張村（後、静岡県小笠郡南郷村、等。現、静岡県掛川市上張）に、河井重蔵（安政元年～大正14年。以下、重蔵と略称）の長男として出世した。河井家の家系図は、図1のようになっている。

後に、河井と重要な関係となる一木喜徳郎（以下、一木と略称。拙稿「戦中・戦後における『大日本報徳社』の甘藷増産活動に関する研究(1)－『丸山方作日記』『河井弥八日記』の分析を中心に－」<以下、研究(1)と略称。なお、本稿は、研究(2)－その1と略称>の表10参照。後述表3参照。)は、慶応3年4月4日、現、静岡県掛川市倉真に、岡田良一郎（以下、良一郎と略称）の2男（兄は岡田良平<以下、良平と略称。研究(1)－表10、後述表5参照>）として生まれていた。一木の父良一郎と、河井の父重蔵とは、政敵であった。

ここで、簡単に河井家の先祖にふれてみよう。

河井家の菩提寺、現、掛川市神明町の懸河山「神宮寺」の過去帳によると、次のようである。寛永年間（1624年～1644年）から、掛川宿塩町に住む三河屋徳兵衛を祖とした。2代を経て三河屋弥八と改称、以後歴代が襲名するようになり、領主の御用達をしていた。文政年間に、3回も火難に遭った為、掛川宿南郊の上張に移って来た（研究(1)－表3－1－①、等）。

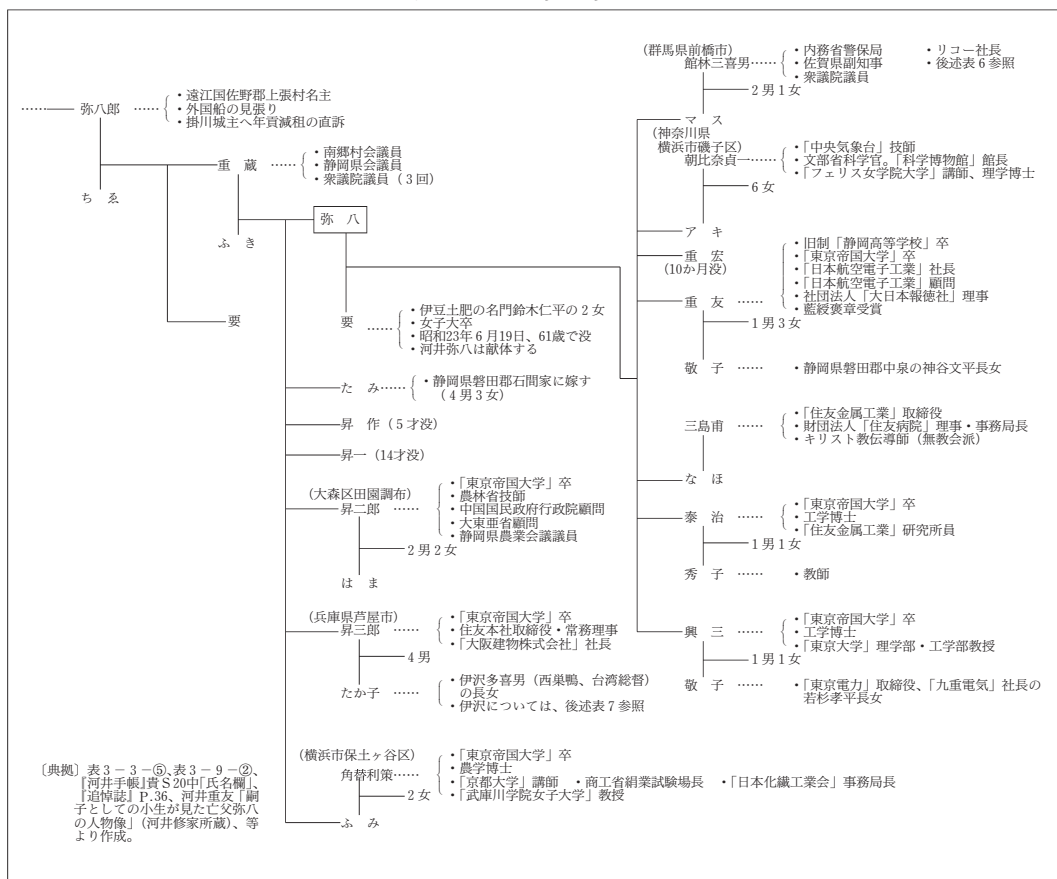
上張で初めて生まれた河井の祖父河井弥八郎（以下、弥八郎と略称。図1参照）は、河井の妹石間たみ（図1参照）の字と思われる回顧文に次のように記されている。

「河井弥八郎ハ天保五年生 ちゑハ天保七年生と申ます 嘉永六年にはアメリカのペリー来航一翌安政元寅年には大地震台風大洪水（安政五年）そして疫病(注)奈ど天災人災が毎年續

き掛川藩の領内四十数ヶ町村の庄屋達々相談協議して藩へ減租を願出たるも聞入れず其時ニ初馬村の庄屋作兵衛と語らい非常手版を取る事とし其時家を出る時武士の服装をし御用提灯を持ち曾祖母ちゑニ向い意を決する處ありて出て行くが悪くすれば打首ニされると云ったそうですその時夜陰ニ乗じ緊急出仕と偽り門番を呼起して直ちニ城内ニ入り殿様(太田氏かー引用者注)ニ減租の直訴をしました其夜ハ城内ニ曲者闖入とあって上を下への大騒動と奈り直ちニ召し取られて監禁せられてしまった其時ちゑは上張の宅で捕ゑられ乳呑児(重蔵)を抱へて唐丸籠ニ容れて城内ニ送られ今日ハ打首か明日ハお仕置かと覚悟を決めて居たそれから餘り日も経た奈い内に突然無罪方免と奈りて帰宅を許され年貢も減免されたと云ふ事を祖母ちゑから聞きました」(研究(1)－表3－3－⑦)

これによると、弥八郎は、安政年間の度重なる天災・人災に対し、町村の庄屋仲間と相談協議して藩に減租を願い出た。聞き入れられず、初馬村の庄屋作兵衛と、打首覚悟で掛川城に侵入、城主に減租の直訴をした。妻ちゑと乳飲児の重蔵も、監禁された。

図1. 河井弥八家の家系図



これから、弥八郎は、打首覚悟の減租の直訴により、村人の食などの生活を守ろうとした様子が伺える。

また、次のような回顧文もある。

「嘉永六年ニはアメリカのペリーか浦賀ニ来り翌安政元年ニは伊豆の下田へ其頃外国船が續々渡来し日本国中の人心不安の時と奈り幕府ハ国民ニ対し異国船と見たら打はたせの命令出したそこで弥八郎は掛川藩四十数ヶ町村の農民指導隊の宰領<sup>(に)</sup> 選ばれ天気の日ニは国安川千浜村の海岸へ出て沖を通る外国船は奈いかと所有の望遠鏡を持って見張をしたと云ふ事です」(研究(1)―表3-3-⑦)

これらより、弥八郎は、人々の平和な生活を望んでいたことが伺える。

河井の父重蔵(安政1年～大正14年。以下、重蔵と略称。図1参照)は、弥八郎の長男である。上張村の戸長、村会議員、郡会議員を歴任し、明治17年以来、静岡県会議員を務めた。同35年以来、衆議院議員に3回当選した。この間、「掛川銀行」の創設、東海道線の建設、伊豆天城山の山林開拓、等地方の殖産興業に務めた。性格は、親譲りの豪放さを持ち、熱血漢で、意思強固と言われる。静岡県会議員時代に、政敵の自由党員の知事を追放したり、県政治の乱れた様子を内閣総理大臣伊藤博文宛に提訴したりした。衆議院議員立候補の時には、親交の厚い栃木県の友人田中正造(天保12年～大正2年。下野国安蘇郡小中村<現、栃木県佐野市小中町>生まれ。『栃木新聞』創刊、編集長となり民権思想を鼓吹。「民権政社中節社」結成、会長として元老院に同社の「国会開設建白書」を提出。「立憲改進黨」に入党、栃木に大きな改進黨勢力を築く。明治24年、足尾銅山鉍毒問題につき政府に質問書を提出。同34年12月、足尾銅山鉍毒問題解決を天皇に直訴)が、河井宅に約1か月滞在し、応援演説をした。同37年12月、天皇・皇后の御真影下賜を受け、何度か天杯拝授の命を受けた。同39年4月、勲四等に叙せられ、旭日小綬章を受け、大正14年1月、従六位とされた。

現在、掛川市所蔵の河井家文書の中、重蔵関係のものには、研究(1)―表3-4-①～⑧他のものがある。

①, ⑤, ⑦, ⑧等をみると、重蔵は、治山、森林、食糧に大きな問題意識をもち、行動したことがわかる。特に、⑧の「食糧問題に対する卑見」は、河井がこれを強く感じ取り、「本書の内容たる事項に関して深き攻求を遂げられ」(河井弥八「緒言」)ることを望んで河井自らが多数印刷したものとして着目される。「緒言」には、これは「大正十三年秋亡父(河井重蔵―引用者注)が病中に執筆」したもので、これと同時に執筆した「粃米の貯蔵と精白に就て」の意見書は印刷され、その大要は、「殆ど全国各地の新聞紙に登載せられし」と書かれてある。また、重蔵が死ぬ前数日「大筆を揮つて『粃の俣精白米とする利益を天下に宣伝せり』と大書した」と書かれてある。この「食糧問題に対する卑見」では、「国民生活の安定と社会平和の維持とは繋つて食糧供給の多少と其価格の騰落とに存す」との考えから、「内地人口の

所要を充足する」方途を論じている。すなわち、重蔵においては、「食糧供給」の確保が、「国民生活の安定」＝「社会平和の維持」と大きく関わって捉えられていた。

河井が、重蔵やその周辺に思いがあったことは、次のような『日記』の記述からも伺える（それぞれの日付の『日記』より）。

昭和15年1月1日、「本日ハ父上（河井重蔵－引用者注）ノ遺品タル木綿ノ綿入及羽織ヲ着用ス今後盛装ノ場合之ヲ例トスヘシ」。

昭和16年1月16日、「全国治水砂防協会」の案内で、足尾及び鬼怒川上流50里の砂防関係事項視察旅行に参加（～1月17日）。

河井が、何故戦中・戦後において、後述するほど日本人の先頭に立って甘藷増産活動に邁進したかの1つの回答が、食糧問題、平和が河井家の祖父、父からの重大な関心事であるという河井家の先祖にありそうである。河井は、昭和天皇の皇居における稲作を、河井のアイデアで始めた（前述）程、食糧問題には関心が強かった。

ここで、河井の妻の要（図1参照）との関係にふれてみたい。

河井の妻の要との結婚は、以下の石間たみの字と思われる回顧文によると、<sup>きんばらめいぜん</sup>金原明善の紹介によるものであった。

「……伊豆土肥の鈴木仁平様から要様（を嫁に迎えた－引用者注） この縁談ハ天龍川畔和田村金原明善様が重蔵ニ知らせて下さいました 金原明善様ハ弥八郎時代から懇意奈お人で東海道の鉄道開通前から度々泊って下さいまして私はよく覚えています」(研究(1)－表3－3－⑦)

金原明善(天保3年～大正12年。遠江国長上郡安間村<現、静岡県浜松市>生まれ。以下、明善と略称)は、以下のような経歴をもつ人物である。維新後、浜松県第一大区四小区の区長となり、同時に治山・治水事業等で、多くの事業指導者として名を馳せた。天竜川治水事業を開始し、明治5年、浜松県から天竜川普請専務とされた。家屋を売却し、63,500余円を静岡県に醸出した。これを基金として「治河協力社」が設立認可(同8年)され、天竜川治水事業等に尽力した。天竜川上流の植林事業、三方原の灌漑を目的とする疏水事業、「天竜運輸株式会社」「天竜木材株式会社」の設立、「金原銀行」の設立、等も行った。社会事業として、同13年以来出獄人保護事業を行い、同21年「静岡県出獄人保護会社」を設立した。明善は、岡田良一郎や、現、掛川市長・「大社」社長榛村純一氏(その父榛村専一は、河井の死亡後の昭和35年7月31日の「掛川市民・大日本報徳社合同葬儀」<於「大社」>時の掛川市長・葬儀委員長)の先祖とも交流があった。私財を抛って「あばれ天竜川」の治水をした人物、出獄人保護に尽力した人物として、現在でも語り継がれている。

明善は、以下のように、『日記』にもしばしば登場する(それぞれの日付の『日記』より)。

昭和13年5月11日、山崎覚次郎(後述表1、表2、表3参照－引用者注)博士に面会、

金原疏水財団と浜松市を中心とする用排水計画を述べる（於 「学士会館」）。

昭和17年5月25日、「丸善」で、「国土ヲ培フモノ」と題する金原明善翁伝を求める。

昭和19年8月8日、「農山漁村文化協会」より、金原明善翁の会開催を通し来る。かつ、中道朔爾著『金原明善』を贈られる。

昭和19年8月16日、金原明善翁の会に出席する（於 「大東亜会館」）。

以上のように、河井を取り巻く祖父、父、金原明善は、河井が生涯をかける食糧問題、治山・治水問題等のいずれかに大きく関わっていた。河井は、こうした人物に囲まれた環境の中で生まれ育った。華族出身者が多い宮中界、貴族院議員の中にも、「静岡の農民」たることを自認していた理由もこのあたりにあると考えられる。

ここで、河井の生まれた自宅（以下、研究(2)では、ここを実家と呼称）と、その周辺を概観してみよう。

平成14年現在の敷地内には、以下のものがある。居室。居宅（2階）。客室（離れ）。トイレ。土蔵（2階）。農機具・肥料置場、作業場。物置。倉庫（2つ）。井戸。池。茶園。果物の木々。茶園（敷地内と外）や果物の木々は、平成14年現在、「大社」賛助会員・「南郷報徳社」理事の平野一夫氏が管理している。居宅は、かつて「お寺の本堂のような」家を、昭和31年に解体・縮小したものである。土蔵は、江戸時代後期のものと言われる（平成14年4月12日に、筆者が初めて入った時点では、重蔵よりも前からの古文書多数あり。過去、数回盗難にも会っている。研究(1)―表3で、掛川市の所蔵としたものは、多くがこの中のもの）。

河井の実家の近くには、父重蔵が強い思いで建設した東海道線がある。掛川駅へは、実家（駅南）から徒歩15分位である。東海道線の金谷駅は重蔵の、新居駅は河井の尽力で開設されたと言われる（杉本良「追憶二題」、『追悼誌』P.40）。

河井の実家横の東名高速道路掛川インターチェンジは、前述榛村純一氏が設立に尽力したものである。

河井が生まれ青少年期を過ごした頃の河井の実家と、一木の実家との間には、次のものがあった。

- ①河井家先祖が御用達として仕えていた領主が居住したところの掛川城。
- ②掛川城の横に、「遠江国報徳社」（明治8年11月12日設立。一木の祖父岡田佐平治が社長。一木の父良一郎が、同9年4月から2代目社長。同44年11月17日から「大日本報徳社」と社名変更、良一郎がこの初代社長となる。以下、「遠社」と略称）。
- ③「遠社」の近くに、「神宮寺」（現在、河井重蔵・河井弥八・河井重友<図1参照。以下、重友と略称>の親子3代が並んで眠る墓3つがある。筆者が墓参で平成14年に訪れた時には、河井家にお世話になったと墓を守る人が複数人いらした）。
- ④「遠社」の近くに、「資産金貸付所掛川分社」（良一郎設立。明治25年7月8日から、「掛川

表1. 河井弥八と関係する人物等(i) - 「冀北学舎」(明治10年7月31日開校~同17年7月) 出身者一

氏名	備考
一木 喜徳郎	遠江国山名郡山町川井。/(研究(1)-表10参照。本文,表2,表3,表4,表5参照)。
戸倉 惣兵衛	遠江国山名郡笠西村愛野。
岡田 良平	遠江国佐野郡倉真村。/(研究(1)-表10参照。本文,表2,表5参照)。
岡田 平次	遠江国佐野郡倉真村。旧,岡田平助。/海軍中佐。
鷺山 謙策	遠江国城東郡土方村上土方。/元治元~S24.5。吉岡弥生の腹違いの兄。「東京帝国大学」医学部別科に入学(卒業せず)。「済生学舎」(東京)に学ぶ。「鷺山病院」院長。/(表2-「吉岡弥生」,表4-「鷺山恭平」参照)。
高林 維兵衛	遠江国長上郡玉村。旧,高林隆太郎。/「静岡農工銀行」頭取。/「丸山日記」に登場。
竹山 純平	遠江国長上郡天王村天王。旧,岡田純平。/(表2参照)。
山田 猪太郎	遠江国榛原郡五和村島。/岡田良一郎の知遇を得て,「大日本報徳学友会報」主幹。M41.1.29~T11.3.23,「大社」副社長。
山田 實太郎	遠江国榛原郡五和村嶋。/(表2参照)。
山崎 常磐	遠江国佐野郡雨桜村遊家。/慶応元.10.20~S29.10.14。「浜松神道中教院」に入学。続いて,「冀北学舎」に入舎。上京,「進文学舎」に入舎。神官2等試験に合格。「雨桜神社」祠官。兵庫県「官幣中社海神社」宮司。「井伊谷神社」宮司。「遠江郷土研究会」設立・会長。「静岡県史蹟名勝天然記念物調査」委員。国学者。/河井としばしば会う(「日記」)。「大社」に,蔵書2,300余冊を寄贈。
山崎 寛次郎	遠江国佐野郡南郷村南西郷。/(表2,表3参照)。
松本 君平	遠江国城東郡中内田村。旧,松本貞次郎。/M3.4.8~S19.7.29。父丑太郎は,私財を投じて牧の原の荒野を開拓した産業功労者。遊学後,パルシルバニア大学,ブラウン大学に学ぶ。「東京新聞」主幹,「東京日日新聞」客員。「東京政治学校」設立。衆議院議員。日露講和のボーツマス会議に参加。中国革命に関わり,広東政府顧問。ジュネーブの軍縮会議に参加。米国学博士。/S19.8.7,松本君平の告別式に至り,焼香する(「日記」S19.8.7)。/(表2参照)。
松村 茂助	「冀北学舎」時代,一木喜徳郎先輩のいたずらに会う。文部省普通学務局長。法学士。/(表2参照)。
鈴木 虎十郎	遠江国佐野郡掛川町二藤村。/海軍少尉。一木喜徳郎の友人。威海衛の攻撃で戦死(鈴木貫太郎は生存)(本文参照)。

(典拠)氏名欄,備考欄の住所,旧氏名は,「奮冀北学舎同窓名簿」「大日本報徳社」文書,等より作成。備考欄は,増田実「教育と人物」高天神城戦史研究会,昭和45年,等多数より作成。

信用組合「くわが国最初の信用組合」。河井は,戦中・戦後において,「掛川信用組合」に,「大社」理事・副社長,「掛川信用組合」組合長の鷺山恭平<研究(1)-表10参照。後述表4参照>をしばしば訪問。

- ⑤一木の実家内には,一木の父良一郎が報徳精神で設立した私塾「冀北学舎」(一木も「秀才」と言われて卒業し強い思いが入っていると思われる塾。後述表1参照)。

父の影響が強い一木・河井ともに,成人になる前に掛川を離れることとなるが,両者にとって掛川は思いの強い故郷であったと考えられる。

## (2) 学歴と故郷

河井は,掛川を離れた後,以下のような学歴,職歴を通る。

明治30年,「静岡県立静岡中学校」卒業

明治33年,「第一高等学校」卒業

明治37年7月,「東京帝国大学」政治学科卒業

明治37年11月,文官高等試験合格

明治37年11月26日,任文部属,実業学務局勤務(文部省)

明治40年2月27日,任佐賀県事務官(内閣,内務省)

河井等は,明治26年11月頃,「静岡県立静岡中学校」の寄宿舎で,「賄大征伐」(まかないだいせいばつ)と言う名の食改善の運動を起こし,寄宿舎では結果自炊制にした(『静中静高史 I 明治11年~大正15年度』静岡県立静岡高等学校同窓会,平成15年復刻,PP.290~294)。これは,食糧問題への関心の現われかもしれない。

河井は,次の『日記』にあるように,「静岡県立静岡中学校」とのつながりを大切にしている(それぞれの日付の『日記』より)。

昭和17年7月5日、「静中（「静岡中学校」－引用者注）同窓会」延期の件で、柴田善三郎（後述表2参照－引用者注）、館林（三喜男、図1・後述表6参照－引用者注）の意見を問う。

昭和17年9月19日、静中校長西村増雄の校葬あり。戸塚との会見を急いだ為出席せず、東京静中同窓会の弔辞代読を依頼する。

「第一高等学校」卒業後には、「第一高等学校」「東京帝国大学」の同窓で、静岡県知事も務めた関屋貞三郎（後述表3参照）と、次のように母校「第一高等学校」と関係を保ち、その植林計画に強い関心を寄せている（それぞれの日付の『日記』より）。

昭和15年12月1日、関屋貞三郎に対し、電話で「第一高等学校」の植林計画に対する参考資料入手の旨を報告し、近日会談のことを協議する。

昭和15年12月5日、一高校長安倍能成を訪問、東京高校の植林事業計画を提示して説明を為す。

昭和15年12月17日、関屋の自動車に便乗して「一高同志会」に出席。

河井は、掛川を離れた後も、故郷（静岡県、遠州、掛川、小笠郡南郷村、等）への思いは強くもっていたと思われる。

また、河井は、静岡県に縁故のあった者も大切にした。例えば、昭和15年3月21日、河井は、静岡県縁故者会に出席した（於「丸ノ内会館」、出席者：湯浅内大臣＜後述表7参照－引用者注＞、小濱＜八彌静岡県－引用者注＞知事、小内総務部長、稲森静岡市長、松井＜茂か、後述表3参照－引用者注＞、柴田＜「静岡県立静岡中学校」出身の柴田善三郎か－引用者注＞、白根、飯沼＜一省元静岡県知事か、研究（1）－本文参照－引用者注＞、長、松村、大竹武七郎、長谷川、宮本、尾崎、山田、坂本、等40余名）（『日記』S15.3.21）。

河井が故郷と繋がるものの主なもの1つに、「遠州学友会」（表2参照）がある。これは、以下のようなものであった。

「山口県や鹿児島県始め、加賀、土佐、岡山、熊本等、大藩のあった県の学生は、旧藩主を中心に、学生の補導も行き届き、団結も強かったが、遠州には不幸、之れを欠いていたが、遠州学友会が之の役目を及ばず乍ら果した様に思う。毎月一回位例会を開き、大部分先輩の負担で学生は御馳走になった。場所は常に安くて美味しい神田の宝亭が選ばれたと記憶する。各大学、高校に幹事が中心、幹事は廻り持ちであったが、其の運営の中心は実に河井（河井弥八－引用者注）さんで、伊藤和三郎（表2参照－引用者注）さんも尽力された。」（黒田吉郎「愛国の士河井先生」、『追悼誌』P.48）

「遠州学友会」の創立は、昭和13年10月26日に、「遠州学友会創立満五十周年祝賀会」が開催（於「軍人会館」）されている（『日記』S13.10.26）ので、明治20年前後と思われる。これには、文化部、雑誌部、水泳部の3部があった。大正元年時点で、一木が特別会員、河

井が会計主任・特別会員，一木の息子一木輜太郎が，評議員・「第一高等学校」在学中となっている（表2参照）。

ここでは，故郷掛川を含む遠州地方の人々や「東京帝国大学」の先輩にあたる一木とは，親密な関係になったと思われる。

「遠州学友会」の中で，甘藷に関わって強いつながりをもった者に，鈴木梅太郎（表2参照）がいる。河井は，鈴木梅太郎に依頼して，戦中に出回った甘藷を使ったいわゆる「藷パン」を作ってもらった。河井が，鈴木梅太郎と長らく交流し，これを作ってもらい，普及させた状況がわかるものを，『日記』から拾うと以下ようになる（それぞれの日付の『日記』より）。

昭和17年8月2日，鈴木梅太郎博士を往訪，「完全食糧ノ成分トシテ甘藷ノ用ハ米，小麦ニ優ルコトヲ聴ク而シテ甘藷粉末94%，魚粉5%，海藻粉1%ニテ完全食物ヲ得ヘシト云フ又甘藷ノ代リニ米ヲ用フルトキハ栄養価直（値かー引用者注）ヲ減スト云フ」。甘藷増産方法の普及に関する河井の希望と実行とを告げ，丸山を中心とする栽培方法を説明する。

昭和17年8月13日，井上健彦（後述ー引用者注）に，電話で甘藷成分分析表を送られることを求める，また井上に貯蔵法2部を呈す。

昭和17年9月13日，鈴木梅太郎博士を訪問，甘藷を原料とする完全食の製造及び普及の件，甘藷生産者売価増の件（麦も同様），国庫金書中の南方草木状説明，等，を問う。

昭和17年11月25日，鈴木梅太郎博士に電話で，「理研栄養パン」（いわゆる「藷パン」のことかー引用者注）の実示を乞う。

昭和17年11月26日，「理化学研究所」鈴木博士の研究に係わる「栄養パン」並びにブタノールの説明を聴く為，関屋貞三郎，男山根健男（後述表5参照ー引用者注），大膳頭の黒田長敬（後述表3参照ー引用者注）子を誘う。「理化学研究所」に鈴木博士を訪ねる。関屋，山根男，西尾忠方子（後述表5参照ー引用者注），黒田大膳頭の外，三浦大膳職事務官，八田侍医頭も来会する。役員7名である。鈴木博士の室に入り，博士からブタノール製出に至るまでの経過とこれの製造方法及び会社につき説明を受ける。次に，「理研ニテ研究完成せる甘藷ヲ原料トセル各種パン類」の性能とその成分の説明を聴く。最後に，パン類その他の栄養製品を供され，試食をして，退出する。宮内省の自動車に乗る。

昭和18年2月24日，鈴木梅太郎博士に電話して，「理研パン」のことを聴く。また，白澤保美（後述表7，表12参照ー引用者注）博士の昨日の予算委員会の状況を報告する。

昭和18年3月31日，「日本生活協会」に於ける「全国製パン組合联合会」及び「日本澱粉株式会社」共同主催の「パン食研究会」に出席する。鈴木梅太郎博士，徳山総太郎の「理研パン」に関する説明あり。「理研パン」その他の甘藷混入パンを試食する。種々意見の発表あるが，パン製造者の営利的に陥ることを怖る。



昭和18年6月27日、徳山総太郎来訪。「理研パン」普及に関し、希望を述べられる。甘藷粉製造方法の適当簡易なるものを求められ、また静岡では近く甘藷パンの製造に着手すべく、既に藪粉5万貫の配給を受けたと云う。ビスケットを贈られる。

昭和18年7月8日、新橋駅「東洋軒」に於ける三橋四郎次（後述表5参照—引用者注）の午餐会に出席する。大村三郎、片岡録朗等と、静岡県に於ける各種産業問題につき意見を交わえる。大村等は、鈴木梅太郎博士と会見し、静岡市に「理研パン」普及計画をなすと云う。

昭和18年7月9日、静岡より名古屋までの間、新任静岡県知事平松治郎<sup>(9)</sup>と同車する。市営パン運営の件等につき進言する。

昭和18年8月18日、杉本（良—引用者注）の室で、片岡録朗に面会し、「理研パン」実行の状況を聴く。

昭和18年8月21日、鈴木梅太郎博士に、樺太に於ける適食パン製法の研究を聴く。

昭和18年9月20日、鈴木梅太郎博士、午後長逝される。白澤博士、野口明より電話を受ける。

昭和19年9月13日、「理化学研究所」に、山本亮を訪ねるが不在。徳山総太郎に面会し、故鈴木博士記念事業費贖金として、金30円を託す。徳山より、甘藷パンを与えられる。また、藪餅を食す、「甚佳味ナリ」。「氏ノパン製法ハ各地企業者ノ私欲ニ依ツテ普及ヲ阻マルコト甚シキハ実ニ憤慨ノ至ナリ」。

また、河井は職業柄健康に留意していたが、頻繁に会い、検査をしてもらっていた千葉医大病院院長の伊東（良次か。表2参照）博士も、「遠州学友会」仲間のようなのである。

例えば、次のような記述がある。

昭和18年5月15日、千葉医大病院に伊東院長を訪ねる。伊藤、長、戸塚（九一郎か、表2参照—引用者注）、桜井、久保諸氏の外、石川淳平出席する。学友会（「遠州学友会」—引用者注）支部設立の件、学友会経理方法の件を相談する（『日記』S18.5.15）。

河井は、丸山に伊東博士の診療を受けさせる（『日記』S17.8.28、等）。

その他、吉岡弥生（表2参照）も「遠州学友会」仲間である（昭和19年1月8日、等に河井は吉岡に書簡を出している）。

戦後ではあるが、河井は、「天真会」という会も創立した。これは、昭和21年5月、河井の主唱でできた郷里の知己・友人と毎月定例会を開いて語る会であり、「遠州学友会」の再現（黒田吉郎「愛国の士河井先生」、『追悼誌』P.49）とも言われた。

### (3) 貴族院書記官時代

河井は、明治40年10月4日、貴族院書記官（内閣）となった。その後、大正8年12月23日、貴族院書記官長（内閣）となった。

表2. 河井弥八と関係する人物等 (ii) - 「遠州学友会」(氏名欄は、大正元年11月10日現在) -

氏名	備考
会頭 男爵 赤松 則良	(後述)。
会計主任 河井 弥八	(本文参照)。
評議員 山崎 覚次郎	(後述)。
評議員 松村 茂助	(後述)。
評議員 長谷川 鐵雄	
評議員 田島 徳三郎	
評議員 帝大 村松 武美	
評議員 高商 黒田 雄平	
幹事 農大 片岡 録郎	
幹事 法大 国枝 博	
幹事 一高 一木 暢太郎	(後述)。
(以下、7名略)	
幹事学校委員 帝大河井 昇三郎	(後述)。
(以下、2名略)	
幹事雑誌部委員帝大見玉 九十	(後述)。
(以下、2名略)	
(特別会員 東京之部)	
一木 喜徳郎	帝国学士院会員。法学博士。/(研究(1)-表10参照。本文、表1、表3、表4、表5参照)。
伊東 良次	医学士。/千葉医大病院院長で、河井を診ていた医者か。
伊藤 和三郎	法学士。弁護士。/「遠州学友会」で後輩の面倒に尽力。/(表10参照)。
岡田 良平	法学士。/(研究(1)-表10参照。本文、表1、表5参照)。
金井 延	帝国学士院会員。「法科大学」教授。法学博士。/静岡出身の山崎覚次郎(後述)等と社会政策学発展に寄与。
河井 弥八	貴族院書記官。法学士。/(本文参照)。
吉岡 弥生	「東京至誠病院」長。女医。/M4.3.10~S34.5.22。現、静岡県小笠部大東町に医師齋山養斎(齋山頭三郎<表4-「齋山恭平」参照>の家分家か)の子として生まれる。腹違いの兄は、齋山謙策(表1参照)。「済生学舎」(東京)に学び、女性で我が国27番目の医師資格を得、東京で開業。「東京女医学校」(現「東京女子医科大学」)創設。「東京連合婦人会」会長。「東京至誠病院」長。子息の博人も「東京女子医科大学」学長となる。第1回婦人文化賞。勲四等宝冠章。/河井の友人、田沢義輔(表7参照)と関係。河井は書簡を送る(「日記」S19.1.8、等)。
山崎 覚次郎	「法科大学」教授。法学博士。/(表1、表3参照)。
松村 茂助	文部省普通学務局長。法学士。/(表1参照)。
松本 君平	米国文学博士。/(表1参照)。
赤松 則良	貴族院議員。海軍中將。男爵。/(表5参照)。
湯河 元臣	通信省管船局長。法学士。/「横須賀藩校学問所」(「修道館」)出身。丸尾文六設立の私塾「協和学舎」出身。旧姓、後藤。旧横須賀藩老の家を継ぐ。現「東京大学」卒。通信省管船局長。通信次官。食糧局長官。法学士。/「日記」に頻繁に登場(本文参照)。河井は、「遠州学友会」仲間の湯河元臣局長官と、食糧増産で協力(本文参照)。
鈴木 梅太郎	「農科大学」教授。農学博士。/M7.4.7~S18.9.20。現、静岡県榛原郡相良町に生まれる。篠田治策(後述)・松本喜作の友人。「東京農林学校」(「帝国大学農科大学」[「東京大学農学部」]の前身)卒。大学院で植物生理化学を専攻。「東京帝国大学」助教授、学位取得。ヨーロッパに渡り、スイス・ドイツに遊学。「盛岡高等農林学校」教授。「東京帝国大学農科大学」教授。日欧の体格差を考え、栄養の化学的研究に従事。脚気治療に有効な栄養成分の米糠からの抽出に成功、オリザニンと名付け、治療原理を確立。オリザニンは、後にビタミンと命名される。帝国学士院賞を受け、同会員となる。高峰謙吉等と「理化学研究所」創立。研究室でビタミン研究、米を用いない酒(「理研酒」)を合成。生家に甘藷を原料にした合成酒工場を設立。基礎研究から新分野まで多くの業績を残すが、戦時中は国策に応じた研究も多い。ドイツ自然科学学士院会員。文化勲章受章。/「日記」に頻繁に登場。河井の要求により、戦時中に普及したいわゆる「諸パン」を作製(本文参照)。
鈴木 藤三郎	前代議員。/安政2.11.18~T2.9.4。遠江国周智郡社森町に生まれる。幼名、太田才助。菓子商鈴木伊三郎の養嗣子となる。岡田良一郎の友人。報徳の研究をする。M16.5、水砂糖の試製に成功。東京小名木川の本宅で社員に「常会」を行う。「台湾製糖株式会社」初代社長。衆議院議員。「大日本精製糖株式会社」設立。「発明王」と言われる(生前獲得した特許は、159件位と言われる)。M35、静岡県駿東郡富岡村(現、裾野市)に鈴木農場開拓。郷里に「周智農林学校」(現「静岡県立周智高等学校」)設立。「日糖疑獄」で有罪、酒匂常明前社長は自殺。/「報徳全書」(尊徳の遺著9,014巻)の写本約2,500冊を「今市報徳二宮神社」へ奉納。
(特別会員 地方之部)	
細田 多次郎	「静岡県立農学校」校長。農学士。/静岡県庵原郡庵原村杉山の「杉山青年会」で講話。M42.2.20~T11.11.17、「遠江国報徳社」名誉訓導。
大石 廉一	助役。/住所は、榛原郡吉田村。/財団法人「培本塾」(所在地、榛原郡川崎町)理事か監事か(表11参照)。
竹山 純平	「韓国銀行」支店副支配人。法学士。/岡田良一郎の息子。岡田良平、一木喜徳郎の弟。息子は、評論家・独文学者・小説家で、「ピルマの豎琴」著者の竹山道雄(「第一高等学校」卒。「東京帝国大学」独文科卒。「第一高等学校」教授)。法学士。「韓国銀行」支店副支配人。「第一銀行」監査役。/(表1参照)。
山田 實太郎	(表1参照)。
三橋 四郎次	早稲政学士。歩兵少尉。/「日記」にしばしば登場。/(表5、表11参照)。
榊原 孝平	「朝鮮総督府」技師。工学士。/「日記」にしばしば登場。篠田治策(後述)とつながっているか。
篠田 治策	「朝鮮総督府」事務官。法学士。/M5.10.12~S21.1.23。丸尾文六設立の私塾「協和学舎」出身。若い頃、池新田村(現、小笠部浜岡町)「東泉寺」の観音山に登り、無二の親友松本喜作(日本の篤農家。「日本一の農家」と称された)と鈴木梅太郎(前述)と、将来の希望を語り、他日の成功を誓い、後3人は約束通り相前後して上京。「第一高等学校」卒。「東京帝国大学」卒。日露戦争の際、旅順攻撃の国際法顧問として従軍。「朝鮮総督府」事務官。「朝鮮総督府」平安南道知事。法学博士。李王職長官。「京城帝国大学」総長。/S17.9.13、鈴木梅太郎博士を訪問、藤田治策博士の古稀祝賀につき、榊原の求めにより資料として少年時代のことを問う(「日記」S17.9.13)。S17.9.16、京城帝大総長篠田博士の事蹟につき、松本喜作翁伝を取り調べる(「日記」S17.9.16)。
篠田 次助	榊原孝平(前述)とつながっているか。
柴田 善三郎	歩兵少佐。/「日記」にしばしば登場。/(表9、表11、表12参照)。
	愛媛県事務官。法学士。/河井と「静岡県立静岡中学校」同窓か(「日記」S17.7.5)。/「日記」にしばしば登場。

〔通常会員 「東京帝国大学」〕	岡田 分平	「牛岡組報徳社」(岡田佐平治, 設立。静岡県下2番目) 社長。S10.2.25～S36.4.2, 「大社」理事。/河井としばしば会う。
	杉本 良	現, 掛川市日坂。河井の「東京帝国大学」の後輩。息子は, 現, 「掛川信用金庫」会長杉本周造氏(研究(1)―表10―「杉本周造」参照)。/河井としばしば会う(本文参照)。/ (本文, 表11参照)。
	河井 昇三郎	河井の弟(図1参照)。/河井が, 西日本に出張の際には, しばしば河井昇三郎宅に立ち寄る(「日記」)。
	児玉 九十	「明星学園」創設者か。/ (表9参照)。
	山崎 昇二郎	河井の弟(図1参照)。
〔通常会員 「第一高等学校」〕	角替 利策	河井の妹ふみの夫(図1参照)。「城東高等小学校」卒。「掛川中学校」卒か。「東京帝国大学」卒。「京都大学」講師。商工省絹業試験場長。「日本化繊工業会」事務局長。「武庫川学院女子大学」教授。/S16.8.31, 河井は, 角替利策の甘藷栽培の成績を一見(「日記」 S16.8.31)。
	〔通常会員 「第一高等学校」〕	
	戸塚 九一郎	M24.3.7～S48.10.13。現, 静岡県掛川市掛川に生まれる。「第一高等学校」, 「東京帝国大学」法学部卒。河井の後輩。高等文官試験行政科に合格。徳島県知事, 山口県知事, 宮城県知事, 北海道庁長官, 福岡県知事, 九州地方総監, 等歴任。第4次吉田内閣の労働大臣。第5次吉田内閣の建設大臣。/S36.6.24～S48.10.13, 第6代「大社」社長。/S19.12.20, 河井は, 戸塚九一郎, 福岡県知事に任ぜられる, と「日記」に書く(「日記」 S19.12.20)。
	一木 轡太郎	一木喜徳郎の息子。検事正。仙台控訴院検事長。/S27.2.26～S47.2.28, 「大社」参事。S47.2.28～S54.2.25, 「大社」顧問。/河井としばしば会う。父の遺言で, 河井を第5代「大社」社長に導いたか(「河井手帳」貴S20.2.12, 等)。/ (表3―「一木喜徳郎」参照)。
	〔慶応義塾〕	
増田 次郎	(表9参照)。	

〔典拠〕氏名欄, 備考欄の最初の／の左の短い肩書きは, 「遠州学友会雑誌」第19号, 学友会, 大正元年11月10日, 掛川市所蔵, 等より作成。備考欄は, 増田実「教育と人物」高天神城戦史研究会, 昭和45年, 等多数より作成。

〔備考〕表にない「遠州学友会」の人々には, 樺葉和三郎(弁護士), 北井波治目(代議士), 太田正孝(大蔵省属), 鶴見左吉雄(商工局長。農商務次官。貴族院議員。表4, 表7参照), 等多数あり(「遠州学友会雑誌」, 「追悼誌」PP.46～47, 等)。

貴族院書記官時代の 大正6年3月から約半年間, 万国議院商事会議出席の為, 欧州へ出張した。この時, ロシア革命に遭遇した。欧州から米国各地も見物した。

河井は, 明治36年から長期にわたり貴族院議長をした徳川家達<sup>いえきと</sup>(後述表5参照)から, 信任を得ていた。その様子は, 次のように伝えられている。

「貴族院書記官長時代先生(河井弥八―引用者注)は議長徳川(家達―引用者注)公爵の格別信任を受けドウしても手放さず先生御自身も少しは他方に轉じ修養もして見たいと思召したが議長手放さず夫れ故に或る時何気なく故郷に帰り村長までも成りたいと洩された一木宮内大臣之を聞て如何尔も河井氏が可愛さうだと徳川議長に交渉して宮内省に引取り内大臣秘書官長にした之が先生宮中入の始めである」(研究(1)―表3―17―④)

#### (4) 宮内省入りとその時代

河井は, 大正15年7月23日, 大正14年2月から宮中大臣を務める一木の推薦で, 内大臣府秘書官長(宮内省)に就任した。

この頃の宮内省関係者には, 静岡県出身または静岡県関係者または報徳関係者が多いことが指摘できる(表3参照)。例えば, 大正15年の宮内省官職における, 静岡県出身または静岡県関係者または報徳関係者は, 以下のようである。

宮内大臣一木喜徳郎(前述)

宮内次官関屋貞三郎(前述)

御用掛山崎覚次郎(表1, 表3参照)

河井の息子河井重友は, この頃の様子を次のように想像する。

「……貴族院事務局から内大臣付及び側近に起用された際には, 当時皇・華族が絶対的に支配していた世界に入ることになり, 一介の平民たる身として大いに苦悩したものと想像

する,」(河井重友「嗣子としての小生が見た亡父弥八の人物像」,河井修家所蔵)

官長としての最初の大きな仕事は、大正15年12月25日に崩御した大正天皇の大喪及び昭和天皇の皇位継承の諸儀式であった。河井は、報道関係者との折衝、記者会見等に労力を費やした。後に、河井が「丸山式」甘藷栽培法を報道メディアに載せることが得意であったのも、この頃の経験によるかもしれない。

昭和2年3月3日、河井は、侍従次長兼皇后宮大夫(宮内省)となった。

河井より侍従関係を逆上ると、明治4年から侍従長が新設、同5年から侍従番長が新設された頃に、士族で静岡に縁のある山岡鉄太郎(鉄舟。現在、静岡市清水の「鉄舟寺」に眠る)が、侍従番長となったことがあった。

昭和5年3月4日、河井は、侍従次長兼皇后宮大夫(宮内省)となった。

昭和6年9月17日、河井は、帝室会計審査局長官(宮内省)となった。

昭和9年4月29日、河井は、勲一等瑞宝章(賞勲局)を受章。

昭和11年2月26日、仕えた内大臣牧野伸顕(表3参照。以下、牧野と略称)は、2・26事件で青年将校の襲撃を受けた。一木も、危険な状況に会った。一木は、昭和10年の天皇機関閣問題で、その憲法学説が平沼騏一郎一派に攻撃され、同11年3月に枢密院議長を辞任した。

河井は、牧野と一木を、両者の生涯にわたって気づかった。河井が、牧野と末永く親交している状況がわかるものを、『日記』『河井手帳』から拾うと以下のようなになる(それぞれの日付の『日記』『河井手帳』より)。

昭和16年6月9日、牧野伸顕伯を訪問し、徳川公追悼会に出席し追口談をすることを請う。

昭和16年11月24日、牧野伸顕伯を訪問する、伯は「甘藷増産ニ付大ニ加勢セラレ来客ニ対シテ予ノ事業ヲ宣伝セラル」と云う。

昭和18年7月30日、牧野伸顕伯を訪問し、大久保(利武、後述表7参照—引用者注)侯薨去につき弔慰する。伯より、甘藷増産につき激励を与えられる。河井は、麦増産もまた大に努力すべき旨を告げ、可能性の大なるを説明し、甘藷と表裏作付方法実行の報告をする。徳川公爵家に関し親切なる質問を受ける。

昭和18年8月7日、牧野伯爵を往訪する。甘藷、梨、瓜を呈す。

昭和18年11月10日、牧野伸顕伯を訪問し、甘藷増産成績を報告する。伯、「大ニ喜フ」。丸山より贈られた柿7個を呈す。

昭和19年2月26日、牧野伯、鈴木(貫太郎か、後述表7参照—引用者注)男、一木男へ電話して、2・26の見舞いを述べる。

昭和20年3月9日、牧野伯爵、訪問(『河井手帳』貴S20.3.9)。

河井は、一木を頻繁に見舞うこと、一木に「大社」運営上の相談・報告をすること、河井の「大社」における活動（特に甘藷増産活動）の支えになってもらうこと、等をした。それらの状況がわかるものを、『日記』から拾うと以下のようなになる（それぞれの日付の『日記』より）。

昭和16年9月26日、一木男に、藤田久蔵（研究(1)参照—引用者注）が送付した「高酸性肥料試験ノ説明書」を郵送する。

昭和16年10月9日、一木男爵を訪問、健康を問う。甘藷栽培実見の件等を談話する。

昭和17年1月31日、一木男爵を訪ね、甘藷増産の為の農事講師派遣案につき報告する、「大ニ満足セラル」。

昭和18年8月7日、一木男爵を訪ねるが、不在。甘藷を呈す。令嬢に面会し、鎌倉の別荘へ避暑することを勧説する。

昭和18年8月21日、「一木先生喜寿祝賀会」に出席する（於「学士会館」）。関屋（貞三郎—引用者注）委員長の挨拶、野口明の事務及び会計報告、木戸（幸一、後述表5参照—引用者注）内大臣の乾杯の辞、水野鍊太郎博士（後述表5参照—引用者注）、松井茂博士、山崎覚次郎博士の近懐談あり、最後に男爵の謝辞あり。

昭和19年12月17日、一木の死に際し一木邸に行く。

河井は、一木の死後も一木を偲び、以下のような行動を取った。

昭和29年12月10日、「一木先生追悼会代表者」として、『一木先生回顧録』の発行者となり、同書を発行した。

昭和29年12月17日、「一木先生追悼会代表者」として、「一木先生追悼会」を行った（於上野「精養軒」、出席者：232人）（表3-7-②）。

昭和30年6月頃、「一木先生追悼会代表者」として、『一木先生を偲ぶ』（「一木先生追悼会」の追憶談の速記）を出版した（表3-7-③）。

宮内省時代の職等により、河井の人柄も出来てきたと思われる。重友は、次のように語っている。

「人柄—一言にして云えば、謹直貴重面の人。対人関係においては調整力抜群、公正なる人物にして公私の別をきびしく守っていた。／家庭に於てはむしろ寡黙の方、但し、時に大いにユーモアを発することあり、／勤務先（特に宮中）のことについては家庭では殆ど語らず。これら亡父にあらわれた人柄は、長年に亙って書記官、侍従御用掛などの職にあり、秘書役的職務に徹したことから形成されたものと思う。」（河井重友「嗣子としての小生が見た亡父弥八の人物像」、河井修家所蔵）

宮内省時代における河井と、昭和天皇・皇后との交流に関する話は多数あるが、ここでは水泳に関するものをみてみよう。

河井は、学生時代から水泳が得意であり、昭和天皇に水泳を教えた。河井の水泳にまつわるエピソードは、次のようなものが残っている。

- ①「……大学学生時代の事だが、或る年暑中休暇にて帰宅中、隣家の大谷千太郎なる者、先生より一、二年年長なりしが、此の者附近の溜池『テウケン』にて水泳中、過って沈没し、……、先生（河井弥八―引用者注）之を聞くや、直ちに同池に行かれて、沈没の位置を聞いて、御自身で直様飛び込み、辛うじて千太郎を引摺り出し、其の命を助けた……。」（袴田鷹邨「故河井弥八先生七十年の想出」、『追悼誌』P.34）
- ②「……、舞坂（現、静岡県浜名郡舞坂町―引用者注）に遠州学友会の水泳部があって、四五日宿泊した事がある。上は大学生から下は小学生迄、雑然として起臥<sup>（きが）</sup>を共にしたものである。……。或る日『河井（弥八―引用者注）さんが来た』と云って、皆で迎え、二、三日滞在された事がある。其の時河井さんは正に統領の概があった。」（黒田吉郎「愛国の士河井先生」、『追悼誌』P.48）
- ③「水泳＝学生時代から修練す、古式流／側近時代には夏は必ず昭和天皇のお相手をした。（於、葉山、又は沼津）／観海流であったと思う、／退官後はすっかりやめていた、」（河井重友「嗣子としての小生が見た亡父弥八の人物像」、河井修家所蔵）

河井は、『日記』によると、戦中もゴルフをしているが、それは次のような人間関係からのものでもあったようである。

「ゴルフ、乗馬―特に宮中に入ってから、趣味というよりは側近奉仕者たる職務柄この練習に身を入れていた。」（河井重友「嗣子としての小生が見た亡父弥八の人物像」、河井修家所蔵）

ゴルフ場は、河井による「丸山式」甘藷栽培法の普及の場所にもなった（後述）。

宮内省時代に、天皇を真中において、一木と、ポツダム宣言を受諾した鈴木貫太郎と、河井の3者のトライアングルが出来ていたとする見方がある（堀内良『冀北学舎』、大日本報徳社取扱、平成10年、PP.48～51。堀内良氏談）。それは、次のようなものである。一木の従兄弟で私塾「冀北学舎」時代の同級生・親友の鈴木虎十郎（表1参照）は、海軍少尉として日清戦争に従軍し、清国の要港威海衛の攻撃に指令艇乗員として先頭を切って突入したが、集中砲火を浴び沈没、壮烈な死を遂げた。この時、鈴木貫太郎は6号艇の艇長であったが、魚雷凍結で発射できず、引き返し生きた。両鈴木は、海軍兵学校卒であった。昭和4年の侍従長の後任選任において、政治嫌いで軍人は政治に干与すべからずを信奉する鈴木貫太郎海軍大将を、延々3時間に及ぶ説得の2日後に、侍従長就任を承諾させた。一木は、鈴木貫太郎が、自分の「冀北学舎」時代からの親友故鈴木虎十郎の戦友であることを意識していたであろう。以後、河井にとっては、鈴木貫太郎が上司になった。こうして、天皇を真中においた3者のトライアングルが出来た。

『日記』を見ると、河井は、宮内省を辞した後も、一木に対するのと同様にしばしば鈴木貫太郎に会った。また、一木死後の「大社」機関誌『大日本報徳』第44巻第2・3号（一木先生記念号、昭和20年3月）の題字は、河井が、枢密院議長・男爵鈴木貫太郎に書いてもらうよう編集長に指示したものである（研究(1)－表3－17－⑦，P.706）。ポツダム宣言受諾時には、一木は亡くなってはいたが、3者の精神的トライアングルはあったと言えそうである。

河井は、天皇・皇后から、信任を得ていた。その様子は、次のように伝えられている。

「……時至り宮内官を辞する時に陛下に拝謁した陛下のお言葉に宮中には夫々適當の仕事もある依て辞し去らずとも止まって何か外の官に就いたらどうかと身に余る優<sup>(ゆうじょう)</sup>誼が下ったが先生は既に予期した年限を御奉公申上尚社会に志さず仕事が残っておりますからドウしてもお暇を賜りたいと言上したと云う御親切の厚がりし此の一事に依ても明諒である（先生直話）」（研究(1)－表3－17－④）

河井は、宮内省を辞した後も、頻繁に皇室を訪れ、皇室行事等に参加し、皇室との関係を保った。以下は、その一例である（それぞれの日付の『日記』より）。

明治14年7月1日、皇后陛下から、「特別の思召」を以て「御野菜一籠」を下賜される。「此御品ハ生物学御研究室附属ノ畑ニ作ラシメ給ヘルモノナリト拝察シ感激ニ堪ヘス」。

昭和17年11月28日、皇后宮職に大夫事務官を訪ね、義宮殿下御誕辰につき奉賀する。黒田大膳頭を訪ね、甘露寺侍従次長、福羽御用係にも面会する。

昭和18年10月9日、霞ヶ関離宮に参入する。照宮殿下御帰嫁につき、旧奉仕者に対し、拝謁並びに午餐の御陪食を賜う。一木男、牧野伯、奈良男、関屋、佐藤博士等を初めとして百余名出席する。

昭和18年12月23日、皇太子殿下御誕辰につき奉賀の為参内する。皇后宮職に至り、奉賀し記帳する。

こうした皇室との関係が、後の甘藷増産活動の後ろ楯にもなっていたと思われる。

河井は、天皇・皇后のことは、常に頭の中にあっただと思われる。河井の身近にいた娘館林マス（図1参照）は、河井が亡くなる直前に、彼が毎日天皇の夢を見ていた状況を伝えている。

「亡くなる十日程前に、両陛下が大変御心配遊ばされておいでになるとの事で、お使者をお差向け下され御苑のお野菜を沢山御見舞に頂戴いたしましたのですが、その時の父は感泣止まる所を知らず、この感激をチャンスとして一ぺんに病気が吹飛んでしまってくれたらよいのにと希った位でございました。その翌日父の命をうけて、私の主人が宮中に御礼言上に上りましたので、その報告を父にいたしましたところ『此の頃は毎日陛下の夢を見る。今も那須の御用邸で、お散歩のお供をしていたところだ』と、なつかしように目を細めて話

しておりました。また現在の日本の状態には、日夜心を痛めておりました。」(館林ます子「父についての思い出」、『追悼誌』P.2)

なお、河井はこの時代に、「報徳経済学研究会」(一木会長。表4参照)に、研究会員として入会した。これは、昭和11年12月、遠山信一郎、後藤文夫、中川望、佐々井信太郎、文部省の伊東延吉(以上、表4)、等の発議により、欧州の経済学に対する「報徳経済学の樹立を目的」に設立されたものである。研究会員は、表4の者等100名以上であった。河井は、この研究会員として、何度か本会に出席し、報徳の学習をした(『日記』)。本会は、同18年9月に「報徳経緯協会」に発展解消された。

なお、理由は不明であるが、河井は本会には入会したが、昭和15年1月現在でも、同19年

表3. 河井弥八と関係する人物等 (iii) - 皇室, 宮内省関係一

氏名	登場年. 月. 日等	備考
故明治天皇 故大正天皇 (昭和天皇) 裕仁 皇后・良子 照宮・成子 久宮・祐子 孝宮・和子 順宮・厚子 秩父宮・雍仁 勢津子 高松宮・宣仁	S 7 当時 S 7 当時 S 7 当時 S 7 当時 S 7 当時 S 7 当時 S 7 当時 S 7 当時 S 7 当時 S 7 当時	M45.7没。 T15.12没。/河井は、大正天皇祭に参加。 ( )は、後の名称。/丸山方作、河井の甘藷増産活動と深く関わる(本文参照)。 河井の甘藷増産活動と深く関わる(本文参照)。 天皇裕仁の御子。河井は、誕生祝いをする。 天皇裕仁の御子。 天皇裕仁の御子。 天皇裕仁の御子。 天皇裕仁の弟。 その妻。 天皇裕仁の弟。/丸山方作、河井の甘藷増産活動と深く関わる(研究(1)-本文参照。本文参照)。
喜久子 (三笠宮) 崇仁 宮内省 宮内大臣 一木 喜徳郎	S 7 当時 S 7 当時 S 2 当時	その妻。 天皇裕仁の弟。 M38.12現在、法学博士。法制局長官兼内閣恩給局長、「東京帝国大学法科大学」教授、高等捕獲審検所評定官。静岡県平良。/慶応3.4.4~S19.12.17。二宮尊徳のいわゆる「4大高弟」の1人岡田良一郎の息子。岡田良平の弟。「冀北学舎」出身。「帝国大学法科大学」卒(教授は、穂積陳重、鳩山和夫、金子堅太郎、等。同窓は、内田康哉。早川千吉郎、林權助、鈴木馬左也、等)。内務省入り。ドイツに私費留学し、国法学を修める。内務書記官兼任のまま、「法科大学」教授(行政法、国法学を担当。柳田国男の後任。一木後任の「行政法講座」担当は、美濃部達吉)。M33、貴族院議員(勲選)。第2次桂内閣で内務次官となり、地方改良運動に努める。文部大臣。内務大臣。枢密顧問官。枢密院副議長。宮内大臣(T14~S8)。男爵。S9、西園寺公望、齋藤実等の推薦で枢密院議長、天皇機関説問題で、憲法学説が、平沼麒一郎一派に攻撃され、S11.3辞任。法学者としては、国家主権・天皇機関説の立場をとり、門下・大学後任の美濃部達吉の天皇機関説の源流となる。政治的には、山県有朋系官僚。貴族院の会派では、「茶話会」所属。/「遠州校友会」の重要な存在。宮内大臣として推薦して、河井を内大臣府秘書官長(宮内省)にする。/S9.4.27~S19.12.17、「大社」第4代社長。「大社」社長時代に、副社長河井に補佐される。S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S12.8.9、「大日本振興報徳会」総裁。S15.1およびS19.9現在、「中央報徳会」理事、法学博士・男爵。遺言で、没後に河井に「大社」社長を継がせたか。/丸山方作の「大社」での甘藷増産活動に関心(『日記』S16.5.5,等)。河井の甘藷増産活動の支え。/研究(1)-表10参照。本文、表1,表2,表4,表5参照)。
次官 関屋 貞三郎	S 2 当時	S 2 当時、その他に臨時東山御文庫取調掛掛長。/S19.11現在、麴町、紀尾井。/M8.5.4~S25.6.10。栃木県に医師関屋良純の長男として生まれる。妻衣子は、貞明皇后(大正天皇の皇后)の学友でクリスチャン。「第一高等学校」卒。M32、「東京帝国大学法科大学」卒後、内務省に入り、M33、台湾総督府参事官。M40、国内に戻り、佐賀県内務部長・鹿児島県内務部長を歴任。M43、朝鮮総督府に転じて、内務部学務局長・中樞院書記官長を歴任。T8.8.20~、静岡県知事。T10、宮内次官、S8まで牧野伸顯、一木喜徳郎の2代の宮内大臣を補佐。宮内次官を最後に官界を去り、S8.12~S21.4に貴族院議員。「日本銀行」監事。S21、最後の枢密顧問官となる。右翼人脈との関係ももっていたと言われる。/河井と、「第一高等学校」の同窓。『日記』に頻りに登場。河井と交流盛ん。/本文、表5参照)。
参事官 大谷 正男 秘書官 白根 松介	S 2 当時 S 2 当時	宮内省の甘藷増産で、河井とやり取り。 S 2 当時、その他に宮内大臣官房秘書課課長、宮内大臣官房庶務課課長。/宮内省の甘藷増産で、河井とやり取り(本文参照)。
御用掛 清水 澄	S 2 当時	S 2 当時、行政裁判所評定官。/法学者。「皇室令制」で御進講。公職追放で、投身自殺。/S15.1現在、「中央報徳会」評議員、枢密顧問官・法学博士。S19.9現在、「中央報徳会」評議員、枢密顧問官・法学博士。
御用掛 山崎 覚次郎	S 2 当時	S 2 当時、「東京帝国大学」教授(経済学者)。/M元.6.15~S20.6.28。遠江国佐野郡南郷村(河井実家近く)生まれ。「冀北学舎」出身(一木の同期)。「帝国大学法科大学」政治学科卒。静岡出身の金井延(表2参照)門下。「東京帝国大学」教授。我が国の金融論、特に貨幣



				論の先駆的な研究者。金井延等と「社会政策学会」の創立に関わる。「経済学攻究会」の創立に関わる。T15～S5まで、東京職御用係(後に宮内省御用係)として皇室の国際金融問題の顧問役も勤める。「東京帝国大学」退官後、「中央大学」の教授、経済学部長兼商学部長、理事を勤める。「金融学会」初代理事会長。「掛川銀行」頭取。帝国学士院会員。/S15.1現在、「中央報徳会」評議員、「東京帝国大学」名誉教授・法学博士。S19.9現在、「中央報徳会」評議員、「東京帝国大学」名誉教授・法学博士。/S20.6.28, 山崎寛次郎博士、薨去(『河井手帳』貴S20.6.28)。S20.7.15, 山崎寛次郎博士告別式, 帝大経済学研究室(『河井手帳』貴S20.7.15)。/ (表1, 表2参照)。(表5参照)。
侍従職	御用掛 侍従次長 侍従	二荒 芳徳 河井 弥八 甘露寺 受長	S2当時 S2当時 S2当時	S2当時, その他に皇后宮職大夫, 臨時東山御文庫取調掛掛。/ (本文参照)。 S2当時, その他に式部職式部官。/ 宮内省の甘藷増産で, 河井とやり取り(本文参照)。宮内省の甘藷増産で, 丸山方作とやり取り(研究(1)-本文参照)。 宮内省の甘藷増産で, 河井とやり取り(本文参照)。
内大臣府内大臣	侍従 内大臣府内大臣	黒田 長敬 牧野 伸頭	S2当時 S2当時	文久1.10.22～S24.1.25。薩摩藩士大久保利通の次男。妻峯子は三島通庸の次女, 娘雪子は政治家吉田茂の妻。父利通に伴われ, 岩倉遣外使節団に同行, 米国学留学。「東京開成学校」(後の「東京大学」)中退。法制局参事官等を歴任。天津条約の際に伊藤博文全權大使に同行。黒田清隆内閣総理大臣の秘書官。福井県知事・茨城県知事等を歴任。文部次官として井上毅文相, 西園寺公望文相を補佐。第1次西園寺内閣で文相, 文相中に男爵。第2次西園寺内閣で農商務相。第1次山本内閣で外相。パリ講和会議の日本全權。子爵。宮内大臣から内大臣に転じ, 若い摂政官裕仁親王(後の昭和天皇)を輔弼。伯爵。いわゆる重臣グループの1人として政界に身をおくが, 急進派青年将校から「君側の奸」とされ, 5・15事件で内大臣官邸に爆弾を投げられる。2・26事件でも襲撃される。その後, 軍部の台頭で政界から出る。第2次世界大戦後のS24, 千葉県東葛飾郡田中村の自邸で病没。/一木と共に, 『日記』に頻りに登場(本文参照)。
侍従長兼枢密顧問官 内大臣秘書官長 内大臣府内大臣 宮内省御用掛	御用掛 侍従 侍従 侍従	貫太郎 木戸 幸一 湯浅 倉平 国府 種徳	S4.1当時 S5当時 S15当時 S15, S19当時	(本文, 表7参照)。 (表5参照)。 (表7参照)。 S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 宮内省御用掛。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 宮内省御用掛。

表4. 河井弥八と関係する人物等 (iv) - 「報徳経済学研究会」(昭和11年12月26日設立) -

氏名	備考
会長 「中央報徳会」理事長 一木 喜徳郎	(研究(1)-表10参照。本文, 表1, 表2, 表3, 表5参照)。
実行委員 「中央報徳会」理事長 一木 喜徳郎	同上。
〃 〃 大久保 利武	(表7参照)。
〃 〃 文部省専門学務局長 伊東 延吉	文部次官。/S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S15.1現在, 「中央報徳会」理事, 元文部次官。 (本文, 表5, 表19, 表21, 表23参照)。
〃 〃 後藤 文夫	S9.5.10～S37.4.1, 「大社」顧問。S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S15.1現在, 「中央報徳会」理事, 貴族院議員・「日本赤十字社」副社長。S19.9現在, 「中央報徳会」理事, 貴族院議員・「日本赤十字社」副社長。S21.9.4, 「報徳連合会」理事長。この日の「報徳連合会」発会式と「二宮翁生誕百六十年記念大会」(於 小田原)で, 戦中の報徳人の反省, 二宮先生の遺教の理解の不十分さ, 新日本の復興原理としての報徳の重要性, 等を述べた。S27.2.11, 「一円融合会」発起人。「中央報徳会」理事長。/ (表5参照)。
〃 〃 石黒 忠篤	(本文, 表5, 表19, 表23参照)。
〃 〃 松井 茂	(研究(1)-表10参照, 表5参照)。
〃 〃 「大日本報徳社」副社長 佐々井信太郎	M7.5.22～S46.8.9。兵庫県水上市中野町に生まれる。/T11.12.23～S10.4.2, S10.9.21～S23.2.27, 「大社」副社長。S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S12.8.9, 「大日本振興報徳会」会長。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 「大社」副社長。S21.9.4, 「報徳連合会」理事。S27.2.11, 「一円融合会」発起人。S27.5.18, 「一円融合会」理事長。/S14.8.21, 河井, 「大社」で講演を聴く(『日記』S14.8.21)。S19.5.9, 河井, 「報徳の原理と実際」なる講義筆記を贈られる(『日記』S19.5.9)。「日記」では, 遠山信一郎と意見の食い違いの場面あり。S45, 「全国報徳団体連絡協議会」(全報連) 名誉会長。/ (研究(1)-表10参照)。
〃 〃 遠山 信一郎	静岡県地方課長, 富山県学務部長, 埼玉県経済部長, 北海道庁経済部長, 等歴任。報徳仕法を模範とする地方行政の振興に取り組む。静岡県地方課長時代のS5, 「静岡県自治講習所」内に報徳講座の設置を勧める。S6, 農林省・静岡県の経済更生特別指導村として, 「大社」副社長 鷺山恭平の居村小笠郡土方村に, 「大社」副社長 佐々井信太郎指導のもの経済更生に取り組んでもらう。/S11.2.26～S16.2.27, 「大社」参事。S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S初期, 「富山県新興報徳社」等の多数の新興報徳社を新設させる。S12.8.9, 「大日本振興報徳会」顧問。S14.1, 「北海道振興報徳会」設立。S16.2.25～S23.2.25, 「大社」監事。「新興報徳運動」の著書あり。/『日記』では, 佐々井信太郎と意見の食い違いの場面あり。/ (研究(1)-表10参照)。
研究会員	他
〃 〃 有馬 頼寧	(表7参照)。
〃 〃 一木 喜徳郎	(前述)。
〃 〃 石黒 忠篤	(前述)。
〃 〃 伊東 延吉	(前述)。
〃 〃 石川 謙	M24～S44。日本教育史学者。藩校・寺子屋等の近世教育機関, 往来物・教訓書等の教材, 石門心学の分野等を実証的に研究。「東京高等師範学校」研究科から同校専攻科へ進み, 同科卒。「東京女子高等師範学校」教授, 「お茶の水女子大学」教授, 「日本大学」教授などを歴任。石門心学に関する研究を集成し, 「石門心学史の研究」を刊行, 翌年帝国学士院より恩賜賞を授与される。「日本教育史学会」「日本教育学会」「教育史学会」等の設立に寄与。 (表7参照)。
〃 〃 大久保 利武	(表7参照)。
〃 〃 大江 精一	「報徳学園」理事。文学博士。S53現在, 「一円融合会」理事。

〃	加藤 仁平	「東京高等師範学校」助教授。「東京文科大学」教授。文学博士。報徳研究者。／S12.8.9,「大日本振興報徳会」幹事。S21.9.4,「報徳連合会」理事。S27.1.1～,「大社」名誉講師。S27.2.11,「一円融合会」発起人。S45,「全国報徳団体連絡協議会」(全報連)設立・会長<名誉会長は、佐々井信太郎>。S53現在,「一円融合会」理事。／S14.8.16,河井,「大社」で加藤の講演を聴く。／(研究(1)―表10参照)。(本文参照)。
〃	河井 弥八	(本文参照)。
〃	草山 惇造	「小田原報徳二宮神社」官司。T13.4.24～S14.2.23,「大社」幹事。S14.2.23～S40.5.7,「大社」理事。S12.8.9,「大日本振興報徳会」参与。S21.9.4,「報徳連合会」理事。
〃	後藤 文夫	(前述)。
〃	小出 孝三	S12.8.9,「大日本振興報徳会」幹事。S21.9.4,「報徳連合会」理事。S53現在,「一円融合会」理事。／研究(1)―表2-5-⑦の著書を著し,丸山に大きく着目。
〃	佐々井信太郎	(前述)。
〃	千石 興太郎	(表5参照)。
〃	高須 虎六	「宇都宮高等農林学校」教授。／S17.3.5,河井は,「宇都宮高等農林学校」に甘藷増産の協力を求める(『日記』S17.3.5)。
〃	田中 長茂	S17.12.5現在,農林省内「農業報国聯盟」常務理事(『丸山日記』S17.12.5)。「甘藷増産」活動で,河井・丸山方作と会う(本文参照)。
〃	鶴見 左吉雄	(表7参照)。
〃	遠山 信一郎	(前述)。
〃	留岡 清男	報徳研究者留岡幸助の息子。S19.9現在,「中央報徳会」評議員,「中央教化団体連合会」理事長。
〃	中川 望	(前述)。
〃	西村 彰一	S18.1.18現在,「大阪営林局」局長兼「大阪食糧事務所」所長。S19.11.5現在,農商省農政局長。／S15.1現在,「中央報徳会」雑誌部委員,商工省物産局第三部長。／S18.1.18,「大阪商工会議所」副会頭・「食糧対策委員会」委員長湯川忠三郎と,「大阪商工会議所」での「甘藷増産に関する懇談会」に河井を招く(研究(1)―表2-3-⑥)。S19.11.5,農政局長として村田技師と,丸山の自宅に来訪(『丸山日記』S19.11.5)。農政局長として,「大社」の甘藷増産活動に大きな便宜(本文参照)。
〃	藤田 訓二	M19,静岡県志太郡大洲村生まれ。遠山信一郎が静岡県地方課長のS初期,「静岡県立自治講習所」主事,同所内に報徳講座を設置。小笠郡土方村の経済更生を進める。S8,遠山信一郎に引継がれ,富山県社会教育主事。／S12.8.9,「大日本振興報徳会」幹事。S16.1.11～S23.3.31,「大社」常設講師(研究(1)―表10参照)。「戦中の「大社」機関誌『大日本報徳』紙上では,戦闘意欲鼓舞の記述が多い。『報徳を語る』『二宮翁を語る』『新日本建設と報徳道』等の著書あり。
〃	松井 茂	(前述)。
〃	村田 宇一郎	大阪府「天王寺師範学校」校長。『興国民法の研究』寶文館,M45,の著書あり。
〃	矢部 善兵衛	出身地の福島県喜多方で報徳の実践。S12.6.1～S45.8.1,「大社」講師。S12.8.9,「大日本振興報徳会」幹事。S21.9.4,「報徳連合会」理事。S27.2.26～S45.8.1,「大社」幹事。
〃	山口 安憲	「三井報恩会」所属(表5-「米山梅吉」参照)。
〃	湯川 元威	
〃	鷺山 恭平	M5.11.24～S32.2.15。浜松県城東郡下土方村(現,静岡県小笠郡大東町下土方)に,庄屋鷺山頼三郎の長男として生まれる(分家は,「東京女医学校」創立者の吉岡<旧姓鷺山>弥生<表2参照>の家)。「東京法学院」英語法律学科全科卒。良一郎に師事。明治26年,「嶺南報徳社」設立。これは,鷺山淑夫,鷺山恭彦(鷺山恭平の孫。鷺山淑夫の息子。現「東京学芸大学」学長)へと受け継がれている。S10.2,「掛川信用組合」組合長(現「掛川信用金庫」会長は,河井と親交があり『日記』にも頻りに登場し,丸山に関する著『われ飢ゑざりき 丸山方作先生の風格と甘藷増産運動の願望』<昭和26年>を執筆した杉本良の息子杉本周造氏<研究(1)―表10参照>)。／S8.2.26～S32.2.15,「大社」理事。S12.8.9,「大日本振興報徳会」顧問。S20.2.27～S23.2.25,「大社」副社長。S21.9.4,「報徳連合会」理事。／(研究(1)―表10参照。本文,表1-「鷺山謙作」参照)。

他多数

(典拠) 氏名欄は,『斯民』第32編第4号,中央報徳会,昭和12年4月,P.83～86,等より作成。

(備考) 「報徳経済学研究会」が,発展解消された後の「報徳経綸協会」(昭和18年9月18日設立)の役職者は,以下の通り。会長:一木喜徳郎。常務理事:中川望,伊東延吉,佐々井信太郎,安井英二,土方成美,上田辰之助。評議員:留岡幸男,鷺山恭平,遠山信一郎,加藤仁平,小野仁輔,矢部善兵衛(『斯民』第38編第10号,中央報徳会,昭和18年10月,PP.71～96,等)。

9月現在でも,「中央報徳会」(一木が,中心的存在)の役員にはなっていない。

#### (5) 貴族院議員に勅選と人脈の広がり

河井は,昭和13年1月7日,貴族院議員(表5参照)に勅選された。これは,伊沢多喜男(図1,後述表7参照)・関屋貞三郎・一木喜徳郎の尽力,徳川家達の協力,近衛文麿(表5参照)首相の理解によると言われる(『日記』と,河井重友か「故河井弥八の浪人中の活動状況について」,河井修家所蔵,より)。

河井は,貴族院の会派「同成会」(他の会派は,「研究会」「茶話会」「公正会」「交友倶楽部」「同和会」「火曜会」「無所属倶楽部」)に所属した。「同成会」とは,大正8年11月15日,旧「土曜会」所属の貴族院議員14名と旧無所属派の15名,その他2名の合計31名(侯爵議員1,勅選議員23,多額納税議員7名)により結成された貴族院の会派である。大正7年9月の本

格的政党内閣の原内閣成立と同時に「研究会」が与党化した為、「同成会」「茶話会」「公正会」と提携し(幸三派),衆議院の「政友会」、貴族院の「研究会」によるいわゆる「多数による横暴」を非難した。所属議員数は、結成時を最高に、約20名余程度の小会派にとどまったが、昭和21年～同22年の最後の帝国議会(第92回)まで続いた。

この時代に、表5、表6、表7中の多くの人と関わり、人脈が広がったと思われる。後述の河井の「丸山式」甘藷栽培法等の普及活動は、貴族院の会派の枠、貴族院・衆議院の枠に

表5. 河井弥八と関係する人物等(v)－貴族院議員－

氏名	備考
皇族(省略)	
公爵 徳川 慶喜	小石川区小日向第六天町。東京府華族。/徳川15代将軍。
公爵, 貴族院議長 徳川 家達	豊多摩郡千駄ヶ谷村。東京府華族。/文久3.7.11～S15.6.5。江戸城内田安邸に、父田安家主の徳川慶頼, 母高井氏の3男として生まれる。田安家主の6代寿千代(慶頼の長子)死去後, 家を継ぐ。M元.4, 徳川宗家を継ぎ, 「16代様」と呼ばれた。幼名亀之助, 静岳と号す。M2.6, 版籍奉還により静岡藩知事, M4.7, 廃藩置県によりこれを免ぜられる。M17.7, 公爵。M36～S8にわたり, 長期に貴族院議長。T3.3の山本内閣辞職の際, 組閣の内命下るが辞す。ワシントン会議に, 加藤友三郎・幣原喜重郎と全権委員として出席。「日本赤十字社」社長。「日米協会」会長。「華族会館」議長。「斯文会」会長。墓は, 台東区「寛永寺」/河井の有力な後継者。河井の, 貴族院議員の勅使に協力。河井を, 信任。河井も, 貴族院書記官, 貴族院議員時代に彼を補佐。
侯爵 西園寺 公望	M15.3, 伊藤博文に随行してヨーロッパに渡り, 憲法調査。M17.7, 華族令の制定とともに, 侯爵。オーストリア駐在日本公使, ドイツ駐在日本公使兼ベルギー公使。M24, 帰朝し賞勲局総裁, かわら法典取り調べにあたる。M23の帝国議会開設当初から貴族院議員, M26第五議会で, 副議長。第2次伊藤内閣の文部大臣, 外務大臣。第3次伊藤内閣の文部大臣。M33.10, 枢密院議長。第4次伊藤内閣(立憲政友会内閣)の内閣総理大臣臨時代理。第2代立憲政友会総裁。桂太郎と交代で政権を担当し, いわゆる「桂園時代」を作る。T3, 原敬に総裁を譲る。再度の首相退陣後は, 元老の1人として政治的影響力を保持。T8, パリ平和会議の全権委員。S11.3, 2・26事件後の首相奏請を最後に, 発言力をほとんど失う。/S2, 天皇の命で河井は, 京都の西園寺を勅使として訪問。
子爵 谷 千城	陸軍中将。牛込区市ヶ谷。東京府華族。
男爵 赤松 則良	海軍中将。静岡県磐田郡見付町。静岡県華族。/T元.11.10現在, 「遠州校友会」会頭。/ (表2参照)。
男爵 千家 尊福	東京府知事。麻布区新龍土町。芝区芝公園地。島根県華族。/埼玉県知事。M30.4.7～, 静岡県知事。/「杉山報徳社」と関係あり。
勅選議員 前田 正名	麴町区永田町。鹿児島県士族。/「冀北学舎」へ鹿児島から生徒を入塾させる。「興業意見」に二宮尊徳の記述を載せる。
勅選議員 平田 東助	神田区駿河台袋町。東京府華族。/品川弥二郎と, 報徳社を参考にしつつ信用組合設立に情熱を燃やす。
勅選議員 小松原英太郎	錦鶏間祇儀。麴町区富士見町。岡山県士族。/嘉永5.2.16～T8.12.26。備前国御野郡青江村(現, 岡山市)に農業・製問屋の父小松原庄二, 母込直の長男として生まれる。藩費に仕出。M7, 慶応義塾入学, 後中退。「評論新聞」編輯長, 同紙上に「压制政府顛覆すべきの論」を発表し, 新聞紙条例で入獄。「朝野新聞」入社, 「山陽新報」発行, 等。M13, 同郷の先輩花房義賢の推薦で外務省御用掛となり, 官界入り。埼玉県知事。内務省警保局長。S25.8.20～, 静岡県知事。長崎県知事。司法次官。内務次官。M33, 貴族院議員(勅選)。M41.7～M44.8, 第2次桂内閣の文部大臣(文部次官は, 岡田良平)。T5, 枢密顧問官。「拓殖大学」長, 「国学院大学」長, 「皇典研究所」長。
勅選議員 石黒 忠憲	陸軍軍医総監。牛込区場場町。東京府華族。/河井と交流のある石黒忠篤の父。河井は, 告別式に臨し焼香(日記S16.4.28)。
勅選議員 岡田 良平	錦鶏間祇儀。小石川区原町。静岡県平民。/元治元.5.4～S9.3.23。二宮尊徳のいわゆる「4大高弟」の1人岡田良一郎の息子。一木喜徳郎・竹山純平の兄。「冀北学舎」出身。「東京府立第一中学」を経て, 「東京大学予備門」に入学。「東京大学」文学部入学, 「帝国大学」卒業, 在学中特待生。大学院を経て, 「第一高等中学校」教諭, 教授。参事官, 書記官, 視学官等歴任。貴族院議員。「京都帝国大学」総長。小松原英太郎文部大臣の時の文部次官。「通俗教育調査委員会」委員長。文部大臣。「臨時教育会議」の設置に成功。枢密顧問官, 文政審議会副総裁。「産業組合中央会」会頭。/M45.1.29～S9.3.23, 「大社」社長。T7.5.12に「大社」で旧冀北学舎同窓会をやり, 記念写真で前列中央に写る。S3.5.6に東京小石川の自宅で旧冀北学舎同窓会を開催。/ (研究(1)～表10参照。本文, 表1, 表2参照)。
勅選議員 一木 喜徳郎	(研究(1)～表10参照。本文, 表1, 表2, 表3, 表4参照)。
勅選議員 柴田 家門	内閣書記官長。麴町区永田町。山口県士族。
勅選議員 穂積 八束	法学博士, 「東京帝国大学法科大学」教授, 「東京帝国大学法科大学」学長兼枢密院書記官。愛媛県士族。/美濃吉達吉の天皇機関説を排した。/ (表3～「一木喜徳郎」参照)。
勅選議員 高橋 是清	日本銀行総裁。赤坂区表町。東京府士族。/政友会総裁。S11.2.26, 2・26事件で, 蔵相時に殺害される。
公爵, 議長 徳川 國順	渋谷, 猿楽。
伯爵, 副議長 酒井 忠正	淀橋, 戸塚。/貴族院の会派「研究会」。S14.10.16～S15.1.16, 阿部内閣の農林大臣。/S15.11.27, 河井は, 酒井忠正伯に, 丸山方作の業績を告げ, 「農産ノ増進ヲ図ル為大ニ同氏ノカニ倚ラシムコトヲ希望シ更ニ農会ノ腐敗ヲ警告した(日記)S15.11.27)。S18.1.20, 顧問として河井と「甘藷馬鈴薯臨時増産指導部顧問会議」(於 農林大臣官舎)に出席か(日記)S18.1.20)。/ (本文, 表20, 表22参照)。
阿部 信行	朝鮮京城府鎭路区光化門通1。/陸軍大将。S19.7.24～, 朝鮮総督。
青木 一男	渋谷, 代々木大山。/貴族院の会派「研究会」。S17.11.1～S19.7.22, 大東亞大臣(東条内閣時)。
赤池 濃	渋谷, 原宿。/S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(「河井メモ」①)。

	安藤 紀三郎	杉並，获莚。／「陸軍士官学校」出身。陸軍中将。S17.6.9～S18.4.20，東条内閣の国务大臣。S18.4.20～S19.7.22，東条内閣の内務大臣。／S18.6.19，河井は，後藤，安藤両大臣に面会，麦甘藷増産につき配慮を依頼する（『日記』S18.6.19）。
	入江 貫一	世田谷，玉川等々力。
	磯員 浩	品川，五反田。
	伊江 朝助	中野，高根。
	石黒 忠篤	牛込，湯場。／M17.1.9～S35.3.10。石黒忠恵の長男。親戚は，寺内寿一（寺内正毅長男，陸相，元帥），児玉友雄（児玉源太郎次男。陸軍中将）。穂積重遠（穂積陳重長男。重遠の兄弟光子は，石黒忠篤の妻。『東京帝国大学』教授。表3－「一木喜徳郎」参照）。『東京帝国大学法科大学』卒。農商務省に入る。欧州留学。農商務省農務局農政課長等歴任。S6，農林次官。退官後，「農村厚生協会」会長，「産業組合中央金庫」理事長等を経て，S15.7.24～S16.6.11，農林大臣（第2次近衛内閣の時）。『農業報国聯盟』『満洲移住協会』『日本農業研究所』各理事長。S18～S21，貴族院議員（勲選）。貴族院の会派「無所属倶楽部」。S17.6.15，「大政翼賛会」総務。S20.4.7～S20.8.17，農商大臣（鈴木貫太郎内閣の時）。S21，公職追放。参議院議員。後，「緑風会」議員総会議長。憲法調査会委員，「全国農業協同組合中央会」理事等，多数の要職を歴任。S26.10，農林省顧問。／S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S15.1現在，「中央報徳会」評議員，「産業組合中央金庫」理事長。S19.9現在，「中央報徳会」評議員，「産業組合中央金庫」理事長。S30.8，英文「二宮尊徳」（生涯と夜話），研究社，刊行。S30，「アジア農村建設会議」で二宮尊徳を紹介。／S18.1.20，顧問として河井と「甘藷馬鈴薯臨時増産指導部顧問会議」（於 農林大臣官舎）に出席か（『日記』S18.1.20）。甘藷増産運動で，河井と大きく関わる（本文参照）。S20.9.15，「大社」増産講師の為に地下足袋60足を贈るか（『日記』S20.9.15）。／（本文，表4，表19，表23参照）。
	石渡 荘太郎	小石川，鷺籠。／M24.10.9～S25.11.4。東京京橋に生まれる。『東京帝国大学法科大学』卒。大蔵省に入る。大蔵次官。S14の平沼内閣成立で大蔵大臣。S15，米内内閣の内閣書記官長。S16.3，「大政翼賛会」事務総長。S19，東条内閣の大蔵大臣。同年，小磯内閣の大蔵大臣。S20，宮内大臣となり，終戦処理。S15～S20，貴族院議員（勲選）。戦後，公職追放。近衛文麿と学友。父は，司法次官，内閣書記官長，貴族院議員，枢密顧問官，文麿の父篤麿と親交。／S15.1現在，「中央報徳会」評議員，前大蔵大臣。S19.9現在，「中央報徳会」評議員，大蔵大臣。／甘藷増産運動で，河井と大きく関わる。
	内田 重成	牛込，北山伏。／山口県出身か。／山口県への「丸山式」甘藷栽培法普及で，河井と大きく関わる（本文参照）。S16.5.13，丸山の山口県に於ける甘藷栽培講習に謝意（『日記』S16.5.13）。S17.5.29，河井から，甘藷増産実績，写真を示される（『日記』S17.5.29）。
	内田 信也	麻府，三河台。／M13.12.6～S46.1.7。旧帝陸国麻生藩士内田寛の6男として茨城県行方郡麻生村に生まれる。『東京高等商業学校』本科卒。三井物産に入社。『内田汽船会社』設立。『内田造船所』設立。T13，衆議院選挙に当選。岡田内閣の鉄道大臣。S19.2.19～S19.7.22，東条内閣の農商大臣。戦後は，第5次吉田内閣の農林大臣。／農商大臣として，「大社」増産講師に配慮。S19.5.18，河井は，内田農商大臣，次官，湯河食糧管理局長官，等と会見（『日記』S19.5.18）。
子爵	江口 定條	渋谷，原宿。／S17.11.4，千葉県神代村甘藷増産実況視察に参加（『日記』S17.11.4）。／（表15参照）。
子爵	大河内 正敏	下谷，谷中清水。／S17.7.25，河井から甘藷栽培の必要を説明（『日記』S17.7.25）。
	大河内 輝耕	渋谷，原宿。／S16.10.3～S16.10.5の丸山の自宅等への視察に参加（『河井メモ』）。
	大野 緑一郎	北多摩郡，武蔵野町，吉祥寺。／S15.1現在，朝鮮総督府政務總監。S19.9現在，「中央報徳会」評議員，貴族院議員。
子爵	大谷 五平	豊島，西巢鴨。／S17.5.29，河井から，甘藷増産実績，写真を示される（『日記』S17.5.29）。
	大島 陸太郎	四谷，花園。／S18.4.13，河井・戸倉（儀作か一引用者注）による甘藷増産方法実地指導会（於 「井之頭公園」）に出席か（『日記』S18.4.13）。S18.6.4，河井へ，甘藷苗申し込み（『日記』S18.6.4）。
子爵	岡 喜七郎	赤坂，青山南。／S18.6.20，河井，甘藷苗配付（『日記』S18.6.20）。S19.6.10，甘藷分譲希望者（『日記』S19.6.10）。
子爵	岡部 長景	赤坂，丹後。／S18.3.9，河井，「丸山式」甘藷栽培法の著書を贈る（『日記』S18.3.9）。／（表12参照）。
侯爵	河井 弥八	世田谷，北沢。／（本文参照）。
	木戸 幸一	赤坂，新坂。／M22.7.18～S52.4.6。侯爵木戸孝正の長男。『学習院』から，「京都帝国大学法科大学」政治学科卒。農商務省に入る。T6，貴族院議員。近衛文麿，岡部長景らの勧めで，内大臣秘書官長。2・26事件に至る事件連続の時代に，内大臣を補佐。近衛内閣の文相，後厚相を兼任。平沼内閣の内相。近衛（第2次，第3次），東条，小磯，鈴木貫太郎，東久邇，幣原内閣の成立に関わる。A級戦犯として拘留されるが，自由の身となる。／（表3参照）。
書記官長	小林 一三	麴町，永田。／貴族院書記官長。／河井は，小林から多くの情報をもらう（『日記』）。
	伍堂 卓雄	牛込，喜久井。／M10.9.23～S31.4.7。養子輝雄は，永野護・重雄らの弟。『東京帝国大学工科大学』造兵学科卒。造兵中将。造兵技術の導入・発展に貢献。『満洲鉄道』理事。工学博士。S12，林内閣の商工大臣兼鉄道大臣。S12，貴族院議員（勲選）。貴族院の会派「研究会」。『東京商工会議所』会頭。S14，阿部内閣の商工大臣兼農林大臣（農林大臣は，S14.8.30～S14.10.16）。『日本能率協会』会長。『商工組合中央会』会頭。S20，軍需省顧問。戦時統制経済の運用に尽力。戦犯に指名されるが釈放。
	後藤 文夫	渋谷，金王。／M17.3.7～S55.5.13。大分県に生まれる。M41年，「東京帝国大学法科大学」卒。内務省に入り，優秀な官僚として早くから注目される。内務大臣秘書官。警保局長。台湾総督府総務長官。当初は，立憲政友会系，後，伊沢多喜男と近い憲政会系内務官僚とみられた。丸山鶴吉・田沢義鐘らの内務官僚，緒方竹虎らの新聞社幹部，近衛文麿らの若手貴族院議員と新日本同盟を結成。このグループと共に青年団運動を推進し，S5，「日本青年館」「大日本連合青年団」理事長に就任。壮年団運動も推進。同年，貴族院議員（勲選）。貴族院の会派「無所属倶楽部」。平沼騏一郎の「国本社」とも関わる。T12設立の安岡正篤等の「金鷄学院」の後援者の1人となり，S7，これに関わる軍人・官僚の「革新」の団体「国維会」設立における発起人・理事となり，新官僚の総帥とされるに至る。S7～，斎藤内閣の農林大臣，荒木貞夫陸相と組み，「革新」政策を推進，産業組合の拡大に務めた。S9～，岡田内閣の内務大臣。S11の2・26事件の際の内閣総理大臣臨時代理。近衛文麿のプレーンの1人として新体制運動推進。S15，新体制準備委員，「大政翼賛会」常任総務，「中央協力会議」議長，「大日本壮年団連盟」理事長。S17，「大政翼賛会」事務総長，「翼賛政治会」常任総務。S18，「大政翼賛会」副総裁，「大日本翼賛壮年団」長。S18.5.26～S19.7.22，東条内閣の国务大臣。戦犯指名，公職追放，解除。S28，参議院議員。『緑風会』所属。S31，「日本青年館」理事長。／S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S15.1現在，「中央報徳会」理事，貴族院議員。『大日本防空協会』理事長。S19.9現在，「中央報徳会」理事，貴族院議員。／『日記』に頻りに登場。河井は，「大政翼賛会」に関して，後藤とやり取り（本文参照）。S18.1.20，顧問として河井と「甘藷馬鈴薯臨時増産指導部顧問会議」（於 農林大臣官舎）に出席か（『日記』S18.1.20）。S18.6.19，河井は，後藤，安藤両大臣に面会，麦甘藷増産につき配慮を依頼する（『日記』S18.6.19）。S18.10.16，河井は，食糧増産運動につき，後藤國務相，吉田福岡県知事，等に面談（『日記』S18.10.16）。／（本文，表4，表19，表21，表23参照）。
公爵	近衛 文麿	杉並，西田。／S12.6～S14.1，第1次近衛内閣。S15.7～S16.7，第2次近衛内閣。S16.7～S16.10，第3次近衛内閣。S20.12.6，戦争犯罪人容疑者として逮捕令が出て，S20.12.16，自決。／河井が，勲選議員になる時に，理解・協力。

	小坂 順造	渋谷, 金王。/M14.3.30~S35.10.16。長野県上水内郡柳原村(現, 長野市)の名望家小坂善之助の長男に生まれる。「東京高等商業学校」卒。「日本銀行」入行。「信濃銀行」取締役。「長野商業会議所」会頭。「信濃毎日新聞」社長。M45, 衆議院議員に当選, 立憲政友会に所属。農商務大臣秘書官, 秘書課長, 農商務省勸任参事官。拓務政務次官。S7以降, 貴族院議員(多額納税者)。「同成会」。枢密顧問官。「長野電燈株式会社」社長。「信越窒素」社長。「電源開発株式会社」総裁。地方名望家出身, 政・財界で活躍しつつ, 地方とのつながりを大切に中央で大をなした人物の典型。戦後の政治家・実業家小坂善太郎・徳三郎の父。/「日記」にしばしば登場。長野県への「丸山式」甘藷栽培普及で, 河井と大きく関わる(本文参照)。/(表12参照)。
	古島 一雄	世田谷, 経堂。/慶応元.8.1~S27.5.27。但馬国豊岡藩(現, 兵庫県豊岡市)藩士の家に生まれる。上京, 杉浦重剛に学び, M21, 雑誌「日本人」に入る。「東京電報」新聞(後, 「日本」)に移り, 玄洋社系の人々と知り合う。雑誌「日本人」に移り, 「日本及日本人」と改題。「万朝報」に移り, 主筆。M44, 東京府から衆議院補欠選挙に立候補し, 代議士となる。心酔していた犬養毅の立憲国民党に所属し, 以後犬養と行動を共にし, 革新倶楽部に至る。護憲3派内閣で, 通信政務次官。政軍合同でも犬養と行動を共にし政界を引退。[大阪毎日新聞]「東京日日新聞」の客員(後, 社友)となる。S7, 犬養内閣により貴族院議員(勸選)。幣原内閣の組閣に関与。日本自由党総裁鳩山一郎が, GHQにより追放令該当とされた際, 後任総裁就任を懇請されたが吉田茂を推薦。第1次吉田内閣の事実上の最高顧問と目され, 第2次・第3次吉田内閣の指南番と言われた。河井等と無所属議員を糾合し, 「緑風会」結成。/「日記」に頻繁に登場。
	斎藤 万壽雄	麹町, 丸ノ内。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(「河井メモ」①)。
	佐藤 助九郎	麹町, 三番。/S17.5.29, 河井から, 甘藷増産実績, 写真を示される(「日記」S17.5.29)。
	坂野 鉄次郎	京橋, 木挽。/S17.2.3, 河井から, 甘藷増取法講習の説明を受ける(「日記」S17.2.3)。
	柴田 兵一郎	目黒, 宮前。
	鹽田 團平	品川, 上大崎。/S17.5.29, 河井から, 甘藷増産実績, 写真を示される(「日記」S17.5.29)。
	渋沢 金蔵	中野, 宮園通。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(「河井メモ」①)。
	下村 宏	大森, 田園調布。/S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員・法学博士。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員・法学博士。
	関屋 貞三郎	麹町, 紀尾井。/ (本文, 表3参照)。
	千石 興太郎	豊島, 雑司ヶ谷。/M7.2.7~S25.8.22。日比谷生まれ。「札幌農学校」農学科卒業。農事試験場熊本支場技手, 岩手県農事巡回教師, 愛媛県農会技師。島根県農会技師兼幹事, 「大日本産業組合中央会島根支会」理事(後, 理事長)等を兼任し, 部落農会の設置, 町村技術員の設置等を行い, 「島根に千石あり」と中央でも認識される。「産業組合中央会」理事, 副会頭, 会頭を歴任。「産業組合中央会」評議員, 「全国米穀販売購買組合連合会」会長, 「大日本生糸販売組合連合会」会長, 等となり, 「産業組合の独裁王」とも言われた。農業団体統合で「中央農業会」顧問。貴族院議員。貴族院の会派「無所属倶楽部」。戦後のS20.8.17~S20.8.26, 東久邇宮内閣の農商大臣(後, S20.8.26~S20.10.9, 農林大臣), 短期間の就任であった。/S石黒忠馬門下。甘藷増産運動で, 河井と大きく関わる。/(表4参照)。
子爵	曾我 祐邦	淀橋, 西大久保。/S17.6.1, 河井, 甘藷苗交付(「日記」S17.6.1)。
公爵	鷹司 信輔	渋谷, 千駄ヶ谷。/S19.6.10, 甘藷分譲希望者(「日記」S19.6.10)。
	田口 弼一	小石川, 水道橋。/S18.5.31, 河井と会見, 朝鮮に於ける甘藷増産事業計画の進歩した事情につき談話(「日記」S18.5.31)。
	竹下 豊次	世田谷, 玉川田園調布。/「日本林業会」理事(表21参照)。/S19.10.27, 河井, 宮崎県への食糧推進の指導を乞う(「日記」S19.10.27)。/(表21, 表23参照)。
	田沢 義輔	淀橋, 百人。/M18.7.20~S19.11.24。佐賀県藤津郡鹿島村に生まれる。「東京帝国大学法科大学」政治学科卒。文官高等試験合格。M43, 静岡県安倍郡長, 安東村の官舎に移る。「村造りは人造りより」の方針で, 青年教育振興を重視。余暇を使い, 郡内の補習学校・青年団の指導をする。T4, 青年団運動の先覚者山本瀧之助, 来訪。内務省明治神宮造営局書記官兼内務書記官。T5, 「中央報徳会」主催の青年指導者講習会を宿泊講習として指導。T8.6, 「実業補習学校と公民教育」を「中央報徳会」から出版。T8.10, 青年団員奉仕による「明治神宮」造営に成功。T10.8, 近衛文麿, 赤司鷹一郎, 田子一民と, 財団法人「日本青年館」設立に当たる。T13.7, 「大日本連合青年団」創立準備委員長。S4.2, 「社青年期合同同盟会」設立。S5.11, 青年団について, 天皇にご進講。S8.12, 貴族院議員(勸選)。S9.11, 「大日本連合青年団」「日本青年館」理事長。S12.1, 「東京愛市同盟」に協力, 堀切善次郎, 吉岡弥生, 等と, 市政革新の機運を作る。S15.2, 第75期議会議貴族院本会議で, 米内首相・松浦文相に対し, 時局下文教の根本方針と斎藤隆夫事件に関して, 政府と議会の職分を質問し, 暗に軍部の思い上がり批判する。S17.5, 貴・衆両院議員を主体に結成された「翼賛政治会」からの入会勧誘を拒否。S17.5, 地元大久保百人町の町会長となり, 下村湖人の協力で, 町会の建て直しをする。S19.3, 四国の善通寺での地方指導者講習協議会で, 敗戦を公言, 講演中に倒れ, 同月死去。/S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。/S19.3.31, 田沢義輔の病氣を見舞う(「日記」S19.3.31)。S19.12.3, 田沢義輔の葬儀に参列する(「日記」S19.12.3)。/(本文参照)。
	塚本 清治	淀橋, 戸塚。/S15.1現在, 「中央報徳会」理事, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」理事, 貴族院議員。
	次田 大三郎	小石川, 犬塚仲。/広島県出身か。貴族院議員。「同成会」/S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。/S21.5.25, 河井と共に, 松本勝太郎訪住, 松本所有地に, 甘藷栽培を勧誘(「日記」S21.5.25)。/(表8参照)。
公爵	東郷 茂徳	麻布, 広尾。/外務大臣。S20.4.9~S20.8.17, 大東亜大臣(鈴木貫太郎内閣時)。
子爵	徳川 家正	渋谷, 原宿。/河井と大きく関わる。/(本文, 表8, 表9参照)。
子爵	土岐 章	渋谷, 永住。/「道徳誌」に記述。
	中川 望	豊島, 目白。/(表4参照)。
子爵	西尾 忠方	麹町, 九段。松戸市松戸。/S17.11.26, 河井, 関屋貞三郎, 男山根健男, 黒田長敬子等と「理化学研究所」を訪ね, 「栄養パン」等の説明を聴く(「日記」S17.11.26)。S18.4.13, 代理が, 河井・戸倉(儀作か一引用者注)による甘藷増産方法実地指導会(於「井之頭公園」)に出席か(「日記」S18.4.13)。S18.5.25, 河井に京都府下より取り寄せた甘藷苗を示す(「日記」S18.5.25)。
	橋本 圭三郎	淀橋, 西大久保。/(表14参照)。
	長谷川 超夫	牛込, 東五軒。
	平沼 亮三	横浜市神奈川区。
	平塚 廣義	目黒, 中目黒。/S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。
伯爵	二荒 芳徳	四谷, 霞ヶ丘。/M19.10.26~S42.4.21。旧侯爵伊達宗徳の9男として生まれる。二荒家を継ぐ。夫人は, 北白川宮能久親王の5女。T, 「東京帝国大学」政治科卒。静岡県理事官, 宮内書記官, 宮内省御用掛兼東宮職御用掛, 学習院講師を歴任。T14, 貴族院議員。厚生省顧問。興銀監査役。「日本体育会」会長。「大日本少年団連盟」理事長。「ボーイスカウト万国事務局」, デンマーク・シヤム等の各協会, 「日独文化協会」の各理事。/「日記」に頻繁に登場。/(表3参照)。
	堀切 善次郎	小石川, 高田老松。/S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。

侯爵	細川 護立	小石川, 高田老松。/M16.10.21~S45.11.18. 細川護久の4男。細川家第16代当主。大正・昭和時代的美術史家。T3, 貴族院議員。「国宝保存会」会長。「東洋文庫」理事長。戦後、「正倉院評議会」評議員, 文化財保護委員会委員。美術品を愛好, 蒐集し, 蒐集した美術品は, 細川家伝来の美術品・古文書・典籍とともに「永青文庫」(東京都文京区目白台)に收藏されている。/S18.4.13, 代理が, 河井・戸倉(儀作か一引用者注)による甘藷増産方法実地指導会(於「井之頭公園」)に出席か(「日記」S18.4.13)。S19.6.10, 甘藷分譲希望者(「日記」S19.6.10)。
子爵	保科 正昭	牛込, 市谷仲。/S18.4.13, 河井・戸倉(儀作か一引用者注)による甘藷増産方法実地指導会(於「井之頭公園」)に出席か(「日記」S18.4.13)。
	丸山 鶴吉	渋谷, 大和田。/M16.9~S31.2.10. 広島県多額納税者の茂助の3男として生まれる。M42, 「東京帝国大学」政治科卒。内務書記官。朝鮮総督府の警務局長退任し, T13, 内地へ引揚。田沢義輔に東京市助役を譲り, 「日本青年館」理事としてその建設に没頭。「大日本連合青年団」(初代理事長近衛文麿, 2代目理事長一木喜徳郎)発団式では, 理事長代理として, 大会議長を務める。警視總監。貴族院議員(勲選)。S18.6, 「大政翼賛会」事務総長。東北地方総監。財団法人「田沢義輔記念会」初代理事長。/S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 宮城県知事。/「日記」に頻りに登場。
	松井 茂	品川。/広島県生まれ。M26, 「帝国大学」卒。警視庁各部長。韓国内務次官。静岡県知事, 愛知県知事, 「警察講習所」所長, 等を歴任。「国民警察」構想を打ち出す。S9, 貴族院議員(勲選)。「警察協会」副会長, 「警察講習所」顧問。警察官僚と言われた。「日本警察要論」「自治警察」等の著書あり。/S17.11.24, 松井茂博士の頒徳, 喜寿祝賀会あり, 出席する。岡喜七郎, 一木男, 山崎次官, 丸山, 石田諸氏の演説あり, 食堂で俄, 柴田, 松村, 仁井田, 松波諸氏の演説あり(「日記」S17.11.24)。/S9.5.1~S20.9, 「大社」顧問。「中央教化団体連合会」専務理事。S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S12.8.9, 「大日本振興報徳会」顧問。S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員・法学博士。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員・法学博士。/S20.9.9 松井茂, 逝去, を「日記」に書く(「日記」S20.9.9)。S20.10.9, 故松井茂葬儀。「築地本願寺」(「日記」S20.10.9)。/表4参照。
子爵	松平 親義	中野, 野方。/S18.3.9, 河井, 「丸山式」甘藷栽培法の著書を贈る(「日記」S18.3.9)。S18.6.20, 河井, 甘藷苗配付(「日記」S18.6.20)。
子爵	松平 忠壽	目黒, 中目黒。/S17.6.1, 河井, 甘藷苗交付(「日記」S17.6.1)。
	松村 義久保	淀橋, 西大久保。
	松本 勝太郎	渋谷。/S21.5.25, 河井と次田大三郎に, 所有地の甘藷栽培を勧誘される(「日記」S21.5.25)。
	三橋 四郎次	京橋, 京橋。/早稲政学士。歩兵少尉。/M12.8.17~S30.3. 静岡県小笠郡川野村で, 三橋四郎次の長男に生まれる。父は, 30余町歩の茶園を独力で開墾, 「茶業組合中央会」議員, 「静岡県製茶直輪株式会社」取締役で, 県の茶業界の礎石を1人で作ったと言われる程の茶業界功労者で, 県会議長, 衆議院議員。「静岡尋常中学校」卒。「早稲田大学」英語政治科卒, 研究科にも進む。学生時代に, 尾崎紅葉の門に出入りし, S3.11, 俳誌「志ろそう」発行。陸軍歩兵少尉として日露戦争に従軍。川野村村長。静岡県会議員。「静岡県茶業組合連合会議所」囑託。衆議院議員。貴族院議員。「同成会」。「日本茶輸出組合」理事長, 「茶業組合中央会議所」会頭。財団法人「日本茶業会」会頭。財団法人「静岡育英会」理事か。/河井と頻りに会う。/表2, 表11参照。
	水野 健太郎	芝, 白金猿。/貴族院議員, 「同成会」。財団法人「静岡育英会」理事。/S15.1現在, 「中央報徳会」理事, 貴族院議員・法学博士。S19.9現在, 「中央報徳会」理事, 貴族院議員・法学博士。
男爵	三須 精一	渋谷, 代々木山谷。/S17.11.4, 千葉県神代村甘藷増産実況視察に参加(「日記」S17.11.4)。S18.4.13, 河井・戸倉(儀作か一引用者注)による甘藷増産方法実地指導会(於「井之頭公園」)に出席か(「日記」S18.4.13)。
男爵	向山 均	浅草, 橋場。/S18.4.13, 河井・戸倉(儀作か一引用者注)による甘藷増産方法実地指導会(於「井之頭公園」)に出席か(「日記」S18.4.13)。S18.6.28, 河井, 甘藷苗配付(「日記」S18.6.28)。/表10参照。
公爵	山縣 有道	麴町, 富士見。/S18.4.13, 河井・戸倉(儀作か一引用者注)による甘藷増産方法実地指導会(於「井之頭公園」)に出席か(「日記」S18.4.13)。
男爵	山根 健男	赤坂, 青山南。/S17.11.4, 千葉県神代村甘藷増産実況視察に参加(「日記」S17.11.4)。S17.11.26, 河井, 関屋貞三郎, 西尾忠方子, 黒田長敬子等と「理化学研究所」を訪ね, 「栄養パン」等の説明を聴く(「日記」S17.11.26)。
男爵	矢吹 省三	渋谷, 南平臺。/S16.10.3~S16.10.5の丸山の自宅等への視察に参加(「河井メモ」①)。
	安井 英二	荏原, 小山。/文部大臣。S1.7.22~, 内務大臣。この時, 報徳の「芋コジ会」から, 常会を作る。/S15.1現在, 「中央報徳会」理事, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」理事, 貴族院議員。
	米山 梅吉	赤坂, 青山南。/M元.2.4~S21.4.28. 土族和田竹造の3男として, 江戸に生まれる。米山家の養子となる。苦学の末, M30, 「三井銀行」に入行。M42, 「三井銀行」常務取締役, 池田成彬と並んで同行を代表する存在となる。T13.3, 「三井信託」社長。「信託協会」初代会長を長く勤める。S7, 「三井合名」理事。S9, 「三井報恩会」(本会には, 山口安憲も。S20.5.3現在, 文化部長井上玄一も)理事長。ロータリークラブを日本に導入。私費で「緑岡小学校」設立, これは後に「青山学院初等部」となる。S13から貴族院議員(勲選)。貴族院の会派「同成会」に所属。/「日記」に頻りに登場。。丸山方作に, 「三井報恩会」から研究費を助成(本文参照)。S17.2.3, 河井から, 甘藷増収法講習の説明を受ける(山口安憲も)(「日記」S17.2.3)。/表10, 表12参照。
	吉田 茂	豊島, 目白。/貴族院議員。
	吉野 信次	渋谷, 神山。/S17.7.25, 河井から甘藷栽培の必要を説明(「日記」S17.7.25)。

〔典拠〕上段の氏名欄, 備考欄の最初の/の左の住所または単独の肩書き等は, 「貴族院議員氏名表」(明治38年12月24日の調査による) 掛川市役所蔵, より作成。

下段の氏名欄, 備考欄の最初の/の左の住所は, 「河井手帳」貴S20, 中の「貴族院議員宿所一覧表」(昭和19年11月6日現在), より作成。  
〔備考〕「河井手帳」S22によると, S22頃の貴族院各会派の「同成会」(河井弥八所屬) 会員は, 丸山鶴吉, 前田多門, 次田大三郎, 小坂順造, 白澤保美, 岩波茂雄, 米山梅吉, 山崎延吉, である。

表6. 河井弥八と関係する人物等(vi) - 衆議院議員 -

氏名	備考
芦田 均	渋谷区青葉町。/M20.11.15~S34.6.20. 京都に生まれる。父鹿之助は「政友会」代議士。「東京帝国大学法科大学」卒。外務省に入り, ロシア・フランス大使館, トルコ・ベルギー大使館等に勤務。満州事変を機に帰国。総選挙に当選し, 政友会の外交通として通る。軍部の独走に批判的で, 「大政翼賛会」結成に参加せず。幣内閣時の厚生大臣。自由党から離れ, 民主党的結成に参加, 総裁となる。S23.3, 芦田内閣を組閣, 首相兼外相を務める。昭和電工疑獄事件で辞職(結果は無罪)。/京都府への「丸山式」甘藷栽培法普及で, 河井と大きく関わる(本文参照)。
井野 碩哉	渋谷区青葉町。/S16.6.11~S18.4.20, 第2次近衛, 第3次近衛, 東条内閣の農林大臣。S17.4.30, 衆議院議員。「翼賛政治会」/農林大臣として, 甘藷増産運動で, 河井と大きく関わる(本文参照)。

宇田 耕一 おむち 大口 喜六	高知市鷹匠町。/「日本林業会」理事。/ (表21参照)。 麻布区弁町。/M3.5.25~S32.1.27。三河国豊橋に生まれる。丸山方作の従兄弟か。「東京薬学校」「帝国大学薬学科」等に学び、 薬剤師となる。豊橋町長、愛知県会議員、豊橋市長を歴任。M45, 衆議院議員に当選。田中義一内閣で大蔵政務次官。「国民厚生金庫」理事長。「東京化学工業」「豊橋電気」「矢作水力」等の取締役。/S15.4.21, 丸山方作の「高松宮殿下宸記記念謝恩会」で講演。 この時、河井と会う(『丸山日記』S15.4.21。『日記』S15.4.21)。/「信参遠鉄道期成会」で、河井と大きく関わる(本文参照)。 牛込区早稲田南町。/新潟県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。
加藤 知正	世田谷区松原町。/鹿児島県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。
金井 正夫	豊島区目白町。/茨城県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。 和歌山県西牟婁郡白濱町。/『日記』にしばしば登場。S16.10.3~S16.10.5の丸山の自宅等への視察に参加(『河井メモ』①)。 群馬県新田郡笠懸村。群馬県出身か。/S19.1.9, 河井, 木村の需により、笠懸村に行く(『日記』S19.1.9)。 淀橋区西大久保。/S4~, 浜口・第2次若槻内閣の通信大臣。横須賀市長。/社団法人「全国治水砂防協会」理事長。/ (表8参照)。 淀橋区下落合。/S15.1現在, 「中央報徳会」理事, 「満洲糧穀会社」理事長・農学博士。S19.9現在, 「中央報徳会」理事, 衆議院議員・農学博士。/ (表20参照)。
川崎巴之太郎 木村 寅太郎 小泉 又次郎 小平 権一	四谷区愛宕町。/長野県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。 京橋区銀座。/M10.6.18~S22.12.21。島根県那賀郡浅利村(現, 江津市)出身。「東京帝国大学法科大学」政治学科卒。東京市教育課長, 清国雲南省法政学堂講師, 東京市勸業課長, 等歴任。M45以降, 衆議院議員。選挙落選中のT4,5には, 「東京帝国大学法科大学」に再入学し, 弁護士資格取得。T2, 立憲政友会に入党以来, 院内幹事・院内総務・政務調査会長, 等要職を歴任。衆議院では, 予算委員長, 等の各種委員長を歴任。犬養内閣の法制局長官。S11.3.9~S12.2.2, 広田内閣の農林大臣。平沼・阿部両内閣の内閣参議。S15.1.16~S15.7.22, 米内内閣の農林大臣。「翼賛政治会」・「大日本政治会」。晩年は, 軍部に接近。S15の政党解党後は, 「翼賛議員同盟」・「翼賛政治会」の顧問。S19.7.22~S20.4.7, 小磯内閣の農商大臣。公職追放により, 政界の第1線から引退。/甘藷増産運動で, 河井と関わる(本文参照)。
小山 邦太郎 谷蔵 作田 高太郎 島田 俊雄	目黒区上目黒。/M14~S38。現, 岩手県盛岡市に, 旧南部藩士の子として生まれる。「盛岡中学校」, 「第二高等学校」(仙台) 卒。「東京帝国大学法科大学」政治学科卒。内務省に入り, 地方官を経て, 警保局警務課長, 地方局市町村課長, 地方局救護課長, 地方局社会課長, 等を歴任。T11, 内務省社会局長となる。三重県知事。衆議院議員。第4次吉田内閣で, 農林大臣。「中央社会福祉協議会」(後, 「全国社会福祉協議会」)の設立に務め, 会長となる。社会問題, 社会事業関係の著書多数あり。/S15.1現在, 「中央報徳会」理事, 衆議院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」理事, 衆議員議員。/S18.4.26, 河井に, 甘藷及び麦類増産の説明してもらい, 共鳴(『日記』S18.4.26)。
田子 一民	河井の長女マスの夫。河井と「静岡県立静岡中学校」同窓か(『日記』S17.7.15)。衆議院議員。/『日記』に頻りに登場。/ (図1参照)。
館林 三喜男	麻布本村町。/兵庫県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。 麴町区麹町。/山形県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。 目黒区自由ヶ丘。/岩手県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。 津崎 尚武 中越 義幸 芝区三田小山町。/鹿児島県出身か。/S17.1.3, 河井, 鹿児島県への「丸山式」甘藷栽培普及を依頼。 芝区新橋。/高知県出身か。/報徳の熱心家。居村の高知県高岡郡原村は全村結社。河井の甘藷栽培に共鳴, 行動を同じくすることを約す(『日記』S17.9.25)。 S18.11.14, 高知県で河井を迎え, 河井は高橋三郎知事を訪問(『日記』S18.11.14)。
星 一 松浦 周太郎 松村 光三 森口 淳三	本郷区駒込曙町。/S17.1.28, 河井, 間接的に「大社」増産講師派遣を依頼される。 豊島区雑司ヶ谷町。「日本林業会」理事。/ (表21参照)。 渋谷区鉢山町。/栃木県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。 静岡県引佐郡気賀町。/S17.1.10設立の「西遠明朗会」会長。S17.5.29, 河井から, 甘藷増産実績, 写真を示される(『日記』S17.5.29)。 S18.4.30, 「駿州明朗会」発会式に参加(『日記』S18.4.30)。「明朗会」運営に関して, 河井としばしば協議(本文参照)。 S35.1, 静岡県引佐郡細江町に, 丸山方作の碑建立。
三浦 一雄 三宅 正一 三善 信 山崎 達之輔	杉並区下高井戸。/河井と, 「日本林業会」副会長。/ (表21参照)。 武蔵野町吉祥寺。/新潟県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。 杉並区高門寺。/熊本県出身か。/S16.12.15, 丸山方作による衆議院「農政研究会」代議士の為の講演会に出席(『河井メモ』①)。 牛込区東五軒。/S9.7.8~S11.3.9, 岡田内閣の農林大臣。S12.2.2~S12.6.4, 林内閣の農林大臣。S18.4.20~S18.11.1, 東条内閣の農林大臣。S18.11.1~S19.2.19, 東条内閣の農商大臣。「翼賛政治会」/『日記』にしばしば登場。S18.10.28, 第83回帝国議会の貴族院において, 農林省の甘藷増産の姿勢を, 河井に追求される(本文参照)。
横川 重次 米田 吉盛	豊島区池袋。/「日本林業会」理事。/ (表21参照)。 横浜市神奈川区二本塚。

(典拠) 氏名欄, 備考欄の最初の/の左の住所は, 『河井手帳』宮S20, 中の「衆議院議員宿舍一覧表」(昭和19年12月1日現在), より作成。

表7. 河井弥八と関係する人物等 (vii) - 表5, 6 にない政治家, 議員, 官僚一

氏名	備考
赤木 正雄	議員か。農学博士。/『日記』に頻りに登場。/ (表8参照)。
有馬 頼顕	M17.12.17~S32.1.10。久留米藩主有馬頼万伯爵の長男として生まれる。「東京帝国大学農科大学」卒。農商務省に入る。「東京帝国大学農科大学附属教員養成所」講師。「日本教育者協会」設立・会長。T13, 衆議院議員, 後, 「政友会」所属。S4, 貴族院議員。近衛文磨, 木戸幸一と並び, 「革新」的な華族として着目される。S7, 齋藤内閣の農林政務次官。「産業組合中央金庫」理事長。S12.6.4~S14.1.5, 農林大臣(第1次近衛内閣の時)。S15, 近衛・木戸等と, 新体制運動に参加。S15.10, 「大政翼賛会」事務局長(初代)。S20, A級戦犯容疑者, S21, 釈放。/「日本中央競馬会」理事長。/ (表4参照)。
伊沢 多喜男	M2.11.24~S24.8.13。信濃国高遠藩士の子に生まれる。伊沢修二(M15, 我が国初の「教育学」を刊行。「東京音楽学校」長, 貴族院議員<勲選>), 「東京高等師範学校」長。「采石社」創立, 社会事業に着手)の弟。河井の弟昇三郎の妻たか子(父)の父。「帝国大学法科大学」卒, 内務省に入る。和歌山県知事, 愛媛県知事, 新潟県知事。T3, 大隈内閣下で警視總監。T5, 貴族院議員(勲選)。憲政会系の勲選議員を中心に「同成会」を組織, 貴族院における反「政友会」系の指導者の1人となる。内務省の後進にも影響力あり。T13.9.1, 台湾総督(加藤高明内閣の時)。東京市長。5・15事件の後, 齋藤内閣の成立に努め, 入閣要請を辞し, 閣外から支援(伊沢系官僚は内閣に進出)。国体明徴運動に反対し, 「革新」派から攻撃される。S15の近衛新体制にやがて失望。枢密顧問官。戦後, 公職追放。/S15.1現在, 「中央報徳会」評議員, 貴族院議員。S19.9現在, 「中央報徳会」評議員, 枢密顧問官。/『日記』に頻りに登場。/ (図1参照)。
井上 哲次郎	安政2~S19。「東京帝国大学」教授。貴族院議員, 哲学者。/二宮尊徳を国定教科書に入れたとされる。

岩波 茂雄	M14.8.27～S21.4.25。長野県諏訪郡中洲村(現、諏訪市)に、農家の長男として生まれる。「日本中学」卒。「第一高等学校」[「東京帝国大学」]哲学科選科卒。T2,「古本屋『岩波書店』」を開業。T3,「夏目漱石『こころ』」を処女出版する。S2から、岩波文庫を刊行。S20,「貴族院議員」[「同成会」]入会か。S21,「文化勲章」を受章。/河井が大切にした武士道精神について語っている新渡戸稲造(M39～T2,「第一高等学校」)校長。明治42年,「東京帝国大学」教授を兼任。T7,「東京女子大学」初代学長。国連事務局次長)著,矢内原忠雄訳『武士道』を,S13.10に岩波文庫から刊行。河井と,「書簡のやりとりあり(研究(1)-表3-16-①②③参照)。河井は,『河井手帳』宮S20,中の「貴族院議員宿舎一覧表」(S19.12.1現在)に,岩波茂雄の名前を記入。S20.3.30,岩波茂雄,訪賀(『河井手帳』貴S20.3.30)。S20.4.21,岩波茂雄,往訪(『河井手帳』貴S20.4.21)。
岡沢 多六	貴族院議員か。/河井は,食改善の先駆者として,岡沢多六をして,農家の電の改善に着眼し,報徳社中に実施の先鞭をつけた(土岐章「河井弥八先生を偲びて」,『追悼誌』P.9)。
大久保 利武	大久保利通の息子。/S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S15.1現在,「中央報徳会」理事,「貴族院議員」侯爵。/S18.7.14,故大久保利武を弔問する(『日記』S18.7.14)。/ (表4参照)。
木松 三四郎	議員か。/『日記』にしばしば登場。
白澤 保美	貴族院議員か。[「同成会」]。博士。/『日記』にしばしば登場。/ (表12参照)。
鈴木 貫太郎	慶応3.12.24～S23.4.17。和泉国に生まれる。地方官吏の父に従い,千葉,群馬に移る。M20,「海軍兵学校」卒。M22,海軍少尉,水雷艇の艇長として日清戦争に従軍。明石,宗谷,敷島,筑波などの艦長を歴任。T12,海軍大将。T13,連合艦隊司令長官。T14,海軍軍令部長。一木の説得で,S4,侍従長兼枢密顧問官。8年間,侍従長として天皇の御託。2・26事件で,反乱軍に襲われ重傷。男爵。S19,枢密院議長。S20.4.7～S20.8.17,内閣総理大臣(木戸幸一,近衛文麿等の推薦があったか)。S20.8.14,天皇裁断によるボツダム宣言受諾を選択。/ (本文,表3参照)。
俵 孫一	S16.10.3～S16.10.5の丸山の自宅等への視察に参加(『河井メモ』)。S17.11.4,千葉県村代村甘藷産実況視察に参加(『日記』S17.11.4)。
鶴見 左吉雄	商工局長。農商務次官。貴族院議員。/S11.12.26設立の「報徳経済学研究会」実行委員。S15.1現在,「中央報徳会」理事,「東京モスリン株式会社」社長。S19.9現在,「中央報徳会」理事,「東京モスリン株式会社」社長。/ (表4参照)。
中村 円一郎	慶応3～S20。静岡県会議員。T7,多額納税議員。静岡県茶業組合会頭,醤油組合長,「日本勸業銀行」地方顧問等,50に及ぶ静岡県下の会社・銀行の役職につく。
西原 亀三	M6.6.3～S29.8.22。豊岡県与謝郡雲原村(現,京都府福知山市雲原)に生まれる。小学校卒業後,家業を手伝い繭買い等に従事。後,綿布商会,煉瓦工場を設立。雲原村の与謝郡から天田郡への編入の運動をし,神輿知常を知る。M34,神輿の招きで上京,その奥に問題に関する王道主義に共鳴,M38,渡韓,総督府の目賀田種太郎の財政改革攻撃をする。ソウルの「共益社」設立,綿織物販売をし,在韓有数の実業家として,寺内正毅にも知られる。T5,福国し大隈内閣打倒に奔走。寺内内閣成立後,アジア策につき首相に建言し,日中の経済的提携に奔走し,いわゆる「西原借款」を担当する。寺内内閣総辞職後,政界の裏で活躍。田中義一内閣成立後は,人事に反発,日本のファッション化に憤慨。S10,郷里の村長に推され,更生運動に尽力,その施策は全国農村の模範と言われた。/河井は,西原亀三に着目。S15.8.25,西原亀三の為に4枚,揮毫する(『日記』S15.8.25)。
前田 多門	M17.5.11～S37.6.4。大阪市西区に生まれる。『こころの旅』等の著者,女医神谷美恵子の父。[「立教中学校」]卒。「第一高等学校」卒。M42,「東京帝国大学法科大学」卒。恩師新渡戸稲造に,「日本に欠けているものは社会教育である。君は,社会教育家になれ。その準備として一時官界に入り給へ。しかし,一旦官界に入ると,住心地がいいから身を抜くには骨が折れるね」という趣旨の言葉をもらう。内務省に入り,群馬県属。岡山県理事官。内務書記官,内務省参事官,等。東京市助役(この決心は,新渡戸の付言による)。T12.7,ジュネーブ国際労働理事会の政府代表者。S2,後藤新平に随行してソ連邦訪問。「東京朝日新聞社」論説委員。「ニューヨーク日本文化会館」館長。新潟県知事。貴族院議員,「同成会」。S20.8,文部大臣(戦後初),この時,天皇の「人間宣言」の御詔書(S21元日公布)の原義を書きあげる。公職追放。「東京通信工業株式会社」(現,ソニー)社長。「日本ILO協会」会長。「東京市政調査会」会長。S26.6,第6回ユネスコ総会の政府代表。「公明選挙連盟」常任理事(後,理事長)。「日本ユネスコ国内委員会」会長。東京都名誉都民。/S15.1現在,「中央報徳会」評議員,組員日本文化会館館長。S19.9現在,「中央報徳会」評議員,新潟県知事。
湯浅 倉平	M7.2.1～S15.12.24。山口県豊浦郡宇賀村の医師石川康徳の次男として生まれる。「東京帝国大学法科大学」政治科卒。T4,第2次大隈内閣の一木喜徳郎内相のもとで警保局長。T5,「貴族院議員(勲選)」[「同成会」]に所属,政党内閣には関与せず。加藤高明内閣の若槻礼次郎内相の時,内務次官。T14.12～S2.12に朝鮮総督府政務總監として斎藤実が總監を補佐。S11の2・26事件では,一木喜徳郎枢密院議長等と天皇の御託に侍し,反乱鎮静に向け天皇を補佐。斎藤実が殺害された後,内大臣。右翼急進派から「親英米派の君側の奸」とみなされ,暗殺計画の目標とされる。/S15.1現在,「中央報徳会」評議員,内大臣。/ (表3参照)。
吉田 茂	M11.9.22～S42.10.20。旧土佐藩士で自由民権運動の志士である竹内綱の5男として生まれる。妻は,牧野伸顕の長女雪子。学習院に学び,転学して「東京帝国大学法科大学」政治科卒。外交官及び領事官試験に合格。戦後,自由党総裁。5次にわたり,組閣。/S21.9.4,「報徳連合会」発会式で祝辞。

捕らわれずに行われたようであり,「丸山式」甘藷栽培法は多方面の人々に普及したようである。このあたりに,河井の人柄や極端に走らないバランス感覚の良さが伺える。

## (6) 「大日本報徳社」理事・副社長時代

河井は,貴族院議員に勲選された直後の昭和13年2月24日,「大社」副社長に当選した(副社長は,同20年2月27日まで)。後に,大きく関わるころの丸山方作は,既に昭和10年12月5日に,「大社」講師になっていた(研究(1)-表10参照)。

「遠社」,「大社」,報徳関係者は,河井が,「大社」副社長になる以前から,既に宮内省と関係をもっていた。過去に,例えば次のようなことがあった。

①明治16年,宮内省旨を承けて,富田高慶『報徳記』を刊行した。

②明治44年4月,静岡県の興津にとどまった明治天皇は,静岡県知事松井茂を召して,「遠社」の事業顛末を聞いた。



③明治44年5月から静岡県知事をし、「遠社」とも大きく関わった松井茂は、後に宮内省入りした。

④昭和5年5月30日、天皇行幸で「大社」に御臨幸。この時の内大臣は牧野伸顕、内務大臣は安達謙蔵、宮内大臣は一木（この時、兄良平が「大社」社長、一木は顧問）。

⑤昭和12年11月25日、宮内省から霞ヶ関離宮別館（東宮御所に充てられたもの）2棟を「大社」に下付される旨、御沙汰があった。

⑥昭和13年2月に、⑥の建物移転に着手し、建物を「仰徳館」と命名した（現存）。

⑦天皇行幸の後、「大社」は行幸記念の式典を開催した（例、昭和17年5月30日）。

河井が「大社」副社長になった時点では、当時の二宮尊徳研究の第一人者佐々井信太郎（研究(1)－表10参照。表4参照。以下、佐々井と略称）が副社長であった。佐々井は、「朝鮮報徳会」（昭和3年11月3日設立）への指導等を行っていた。また、河井入社後の昭和18年1月27日から同年2月10日まで、佐々井は、「満州国協和会」主催「報徳錬成会」で指導をした。河井は、佐々井からも報徳を学んだ（後述）。

ここで、河井が「大社」入りする前後の彼の行動を、『日記』等から拾うと以下のようになる。

昭和13年1月12日（まだ「大社」入りしていない時－引用者注）、「常会」で「支那事変と国威宣揚」を講演（於「川崎報徳館」。聴衆95名）（『報徳』38.2/S14.2/56）。

昭和13年1月13日、「常会」で「社員に望む」（『日記』S13.1.13）を講演（於「志太出張所」。聴衆62名）（『報徳』38.2/S14.2/55）。

昭和13年2月26日、一木を訪ね、「大社」副社長就任につき挨拶、同社の現在及び将来につき指示を受ける（『日記』S13.2.26）。

昭和13年4月1日、『報徳』に「実践奉仕の途に上らん」を掲載。副社長就任の挨拶をする（『報徳』37.4/S13.4/2～3）。

昭和13年4月2日、「大日本報徳社」理事会に出席（於「大日本報徳社」、出席者：佐々井、河井、鷺山、田辺、飯田、垂松）する（『日記』S13.4.2）。

昭和13年4月3日、掛川町旧松本氏邸で、一木喜徳郎社長、佐々井信太郎副社長、鷺山（恭平－引用者注）・飯田（栄太郎－引用者注）両理事、山崎常磐（表1参照－引用者注）、鈴木町長、岡田佐太郎、袴田銀蔵、静岡県社会課長秋山、等と会った。10時から「二宮佐藤両先生ノ祭典」に出席、表彰式、善報金の下付、社長の告辞、知事代理の祝辞。佐々井の講演。「常会」で「挨拶」をする（於「掛川報徳館」。聴衆458名）（『日記』S13.4.3、『報徳』37.5/S13.5/69）。

上記昭和13年2月26日の状況より、河井の「大社」入りも、社長一木との関係が大きかったと思われる。

## (7) 貴族院議員・参議院議員,「大日本報徳社」副社長・社長時代の諸活動等

河井は、貴族院議員時代(昭和13年1月～)とそれに続く参議院議員時代(同22年5月～),それらと時期をほぼ同じくした「大社」副社長時代(昭和13年2月～)とそれに続く社長時代(同20年2月～)には、人脈も大きく広がり、貴族院、参議院での食糧問題、治山・治水・砂防問題、林業問題、等への取り組み、「大社」での甘藷増産活動、等を行った。その他、以下の諸活動をした。

## ①皇室行事等への参加

## ②徳川公爵家の「家政相続人会」一員、他

河井は、徳川公爵家の「家政相続人会」の一員となった。ここでは、旧将軍家の財産その他の家政上の懸案事項につき、諮問に応じて献策をした。重友は、この仕事についての理由に関して、貴族院議長徳川家達公を、多年貴族院書記官或いは書記官長として補佐し、公爵より多大の恩義にあずかった因縁によるものと思われる、とみている(河井重友か「故河井弥八の浪人中の活動状況について」、河井修家所蔵)。

もとより、河井出身の静岡県には、浜松城(徳川家康のいわゆる「出世城」)、駿府城(家康が建設)、久能山東照宮(家康の遺言で、彼の骨を埋葬した所)、江戸幕府旧蔵書、等があり、静岡県は、徳川とは関係の深い所であった。

河井は、徳川家と深い関係を保った。その状況がわかるものを、『日記』等から拾うと以下のようなになる。

昭和13年3月28日、徳川公爵家で、「久能山東照宮修繕奉賛会」評議員会に出席(『日記』S13.3.28)。

昭和14年11月17日～、徳川家正(後述表8,表9参照-引用者注)公1行の静岡県見学旅行を案内(『日記』S14.11.17～14.11.20)。

昭和15年5月1日、徳川家正公から、大森某の某学校に二宮翁銅像を建立するにつき「報徳」の2字の揮毫を依頼された件につき語られる(『日記』S15.5.1)。

昭和15年12月3日、片平信通翁、来訪、徳川家正公揮毫の軸物に箱書きをする(『日記』S15.12.3)。

昭和16年5月14日、徳川静岳公追悼会並びに記念事業相談会に出席(於「日本倶楽部」、出席者:中川望<表4参照-引用者注>,添田敬一郎<表6参照-引用者注>,土方久徴,鈴木信太郎,田沢義鋪<表7参照-引用者注>代理)(『日記』S16.5.14)。

昭和17年5月2日、徳川公爵より晚餐を饗せられる(『日記』S17.5.2)。

昭和18年4月8日、徳川公が東照宮御参拝を機とし、静岡、浜松の状況御視察の御希望あり、よって三橋、鈴木両氏へその旨を通し配慮を乞う(『日記』S18.4.8)。

昭和19年2月25日、徳川家正公より、「華族会館」に招かれる。相続税決定、疎開実行等

につき御相談を受ける（『日記』S19.2.25）。

昭和20年頃か、「静岡育英会」に徳川家正公を総裁として入れた。

昭和20年6月1日、徳川公爵、見舞い。日光へ避難される（『河井手帳』貴S20.6.1）。

### ③徳川「公爵伝記編纂所」顧問

昭和15年2月3日、河井は、徳川「公爵伝記編纂所」顧問を求められ、諾した（『日記』S15.2.3）。実際に顧問になったのは、同15年4月1日と思われる（『日記』S15.7.29）。徳川公爵とは、徳川家達のことである。

河井は、本編纂所に出頭するようになると、井野辺茂雄文学博士等に面会する機会が多くなった（『日記』）。井野辺（明治10年～昭和29年）は、国学院卒の歴史学者で、正統『国史大系』、正統『群書類従』の校訂・出版に従事し、渋沢家の編纂所に勤務し、『徳川慶喜公伝』の編纂にあたった人物である。昭和17年10月27日には、河井は、本編纂所に出頭し、井野辺博士等に面会し、編纂に関し手伝いもしている（『日記』S17.10.27）。

### ④「全国治水砂防協会」（表8参照）

河井は、「全国治水砂防協会」の重要な1員となった。これは、戦前から、原則として毎週水曜日の正午に協会役員、有志が相会して行った懇談会である。「砂防会館」建設後も、継続した。河井は、貴族院の「同成会」、参議院の「緑風会」でも、中心的存在として、全国の治水・砂防に取り組んだ。河井は、「災害は天災にあらずして人災にありと治水政策の欠陥を喝破して、政府、国民に訴えた（赤木正雄「河井先生」。『追悼誌』P.8、等）。

### ⑤財団法人「静岡育英会」、財団法人「静岡育英会」静岡県支部（表9、表10参照）

「静岡育英会」は、明治18年7月、旧幕臣の子弟で、学費の乏しい者に資金を貸与し、成業させることを目的に設立されたものである。大正6年10月には、規則を改正し、貸付対象範囲を拡大し、静岡県人及び旧幕府に縁故のある者の子弟に及ぼした。同11年8月、財団法人の組織に変更し、事務所を渋谷区原宿に置き、奨学生寮「明德寮」を併置した。第2次世界大戦中焼失し、事務所を新たに中央区銀座西に移した（以上、『社会福祉法人静岡県育英会創立20周年記念誌』昭和47年か）。

河井は、一木と「静岡育英会」の仕事をした。

昭和19年10月12日、本日附で徳川総裁より、「静岡育英会」副会長の正式依頼の通知を受けた（『日記』S19.10.12）。

昭和20頃、徳川家正が総裁、河井が副会長であった。

河井は、しばしば静岡県知事を訪問し、育英会事業への協力を求めた（『日記』）。

### ⑥財団法人「培本塾」（表11参照）

静岡県榛原町川崎に於いて、篠田次助中将の着想で、満州開拓の中堅青年養成の機関として、富士山を見渡す場所に設立した塾。河井と柴田善三郎との協力、徳川家達の命名があっ

た(杉本良「追憶二題」、『追悼誌』P.40)。

「培本塾」は、甘藷増産活動の一翼ともなった。河井は、宮内大臣管轄の「帝室林野局掛川出張所」に依頼し、「培本塾」学生に、林業実地指導の実習等をさせてもらっている。その状況がわかるものを、『日記』から拾うと以下のようなになる(それぞれの日付の『日記』より)。

昭和16年11月2日、帝室林野局(掛川かー引用者注)出張所に、所長伊藤正を訪問、甘藷講習会に出席を勧誘する。又「培本塾」生の為に山林手伝いを頼む。

昭和18年3月24日、「帝室林野局掛川出張所」に、所長を訪ねる。(1)「培本塾」生林業実地指導の好意を謝する、(2)烏柏苗の選択及び普及のことを依頼する、(3)又甘藷作は、根切虫の駆除に有効なる実験談を聴く。

#### ⑦財団法人「興農学園」(表12参照)

河井は、「興農学園」という学校の仕事をした。

「興農学園」の行事に関しては、『日記』に例えば、以下のような記述がある。

昭和17年11月8日、財団法人「興農学園」の記念式に列席の為、西浦村へ赴く。新築中の校舎で、落成式兼記念式を行う。白津理事長の挨拶、大谷校長の謝辞、来賓松前重義工學博士、岡部子爵、河井、清水校長の祝辞あり。了って、甘藷2株を展覧に供される。1回は、渡瀬翁の記念碑を拜し、農場を視察する(『日記』S17.11.8)。

#### ⑧その他

##### ○「林政研究会」

河井等は、「林政研究会」を作り、活動した。

『日記』によると、昭和14年4月13日に発起人会が開催された(於丸の内「常盤家」)。その時の出席者は、伊澤、和田、岡本、本多、河井、佐藤、後藤、白澤、小坂、菌部、香坂、鈴木覚四郎、中川吉造、漆山の14名であった(『日記』S14.4.13)。

##### ○「久連国民高等学校」

河井は、「久連国民高等学校」という学校の仕事をした。

河井は、ここにも甘藷増産を普及させた。

『日記』には、昭和16年9月20日、柴田(善三郎かー引用者注)と「日本倶楽部」に至り、「久連国民高等学校」援助の件、甘藷栽培成績視察団組織の件、等談話する(『日記』S16.9.20)、とある。

##### ○「池之上国民学校会」(表13参照)

河井は、ここにも甘藷増産を普及させた。

##### ○「東京指公会」(表14参照)

##### ○「香邨寮同人会」(表15参照)

○財団法人「晴光園療院」(表16参照)

昭和17年4月17日、関屋貞三郎方に至り、「晴光園療院」理事会に出席する。関屋会長、関屋氏、杉浦氏、村尾、山口外一氏出席する(『日記』S17.4.17)。

表8. 河井弥八と関係する人物等(viii)－社団法人「全国治水砂防協会」(所在地、赤坂区溜池1,「三会堂」)－

氏名	年、月、日	備考
会長		
理事長	小泉 又次郎	S20頃か
常務理事	赤木 正雄	S20頃か
会長	徳川 家正	S32. 8. 1現在
副会長	河井 弥八	S32. 8. 1現在
〃	砂田 重政	S32. 8. 1現在
常務理事	赤木 正雄	S32. 8. 1現在
理事	田中 角栄	S32. 8. 1現在
〃	次田 大三郎	S32. 8. 1現在
〃	福田 赳夫	S32. 8. 1現在

〔典拠〕上段の氏名欄は、「河井手帳」貴S20、中の「氏名欄」、より作成。下段の氏名欄は、「役員名簿 昭和三二、八、一／社団法人 全国治水砂防協会」掛川市所蔵、より作成。

〔備考〕河井は、S16、財団法人「帝国治山治水協会」理事、S22.1.22、「全国治水砂防協会」理事長。

表9. 河井弥八と関係する人物等(ix)－財団法人「静岡育英会」(所在地、渋谷区原宿3-312)－

氏名	年、月、日	備考
総裁、公爵	徳川 家正	S20頃か
副会長	河田 烈	S20頃か
〃	河井 弥八	S20頃か
理事	飯田 英作	S20頃か
〃	篠田 次助	S20頃か
〃	成瀬 達	S20頃か
〃	児玉 九十	S20頃か
〃	江川 英文	S20頃か
〃	字佐美 興屋	S20頃か
〃	古沢 秀弥	S20頃か
監事	増田 次郎	S20頃か
〃	江藤 得三	S20頃か
主事	塩島 金一郎	S20頃か

〔典拠〕氏名欄は、「河井手帳」貴S20、中の「氏名欄」、より作成。

〔備考〕河井は、S18に「静岡育英会」副理事長、S20に「静岡育英会」理事・会長。『河井手帳』S22には、「静岡育英会」(所在地、文京区湯島2-1。聖堂内)の総裁：徳川家正、顧問：徳川慶光、会長：河井弥八、副会長：江川英文、理事：伊藤和三郎、児玉九十、三橋四郎次、等、の記載あり。

表10. 河井弥八と関係する人物等(x)－財団法人「静岡育英会」静岡県支部(所在地、静岡県静岡市)－

氏名	年、月、日	備考
会長		
理事	久保 春海	S20頃か
〃	伊藤 和三四	S20頃か
〃	椋葉 良男	S20頃か
〃	米山 梅吉	S20頃か
〃	加藤 虎之亮	S20頃か
〃	朝比奈策太郎	S20頃か
〃	緒明 太郎	S20頃か
〃	男爵 向山 均	S20頃か
嘱託医	千秋 二郎	S20頃か

〔典拠〕氏名欄は、「河井手帳」貴S20、中の「氏名欄」、より作成。

〔備考〕河井は、S20.2.27、「静岡育英会」理事・会長。

表11. 河井弥八と関係する人物等 (xi) - 財団法人「培本塾」(昭和11年1月設立。所在地, 静岡県榛原郡川崎町静波108) -

氏名	年, 月, 日	備考
理事長 河井 弥八	S20頃か	(本文参照)。
理事 篠田 次助	S20頃か	中將。/『日記』にしばしば登場。/ (表2, 表9, 表12参照)。
// 中村 秀平	S20頃か	
// 三橋 四郎次	S20頃か	早稲政学士。歩兵少尉。/『日記』にしばしば登場。/ (表2, 表5参照)。
監事 杉本 良	S20頃か	(研究(1)-表10-「杉本周造」参照, 本文, 表2参照)。
理事, 塾長 小田原 勇	S20頃か	『日記』にしばしば登場。
// 榛葉 良男	S20頃か	『日記』にしばしば登場。/ (表10参照)。
理事か監事か 大石 廉一	S20頃か	(表2参照)。
監事 鈴木八郎左衛門	S20頃か	
主事 加藤 弥一	S20頃か	

[典拠] 氏名欄は, 『河井手帳』貴S20, 中の「氏名欄」, 杉本良「追憶二題」(『追悼誌』P.40), より作成。

[備考] 河井は, S11.1, 「培本塾」理事。S18, 「培本塾」理事長。

表12. 河井弥八と関係する人物等 (xii) - 財団法人「興農学園」(所在地, 静岡県田方郡西浦町久連神島2) -

氏名	年, 月, 日	備考
顧問 今松 治郎	S20頃か	警保局長。S18.7.1~, 静岡県知事。/ (本文参照)。
// 米山 梅吉	S20頃か	『日記』に頻繁に登場。/ (表5, 表10参照)。
// 江川 英文	S20頃か	(表9参照)。
// 子爵 岡部 長景	S20頃か	貴族院議員。/ (表5参照)。
// 篠田 次助	S20頃か	中將。/『日記』にしばしば登場。/ (表2, 表9, 表11参照)。
理事長 白澤 保美	S20頃か	貴族院議員か。/『日記』にしばしば登場。/ (表7参照)。
理事(常務) 田中 次郎	S20頃か	
理事 小坂 順造	S20頃か	貴族院議員。/ (表5参照)。
// 加藤 成一	S20頃か	
// 松前 重義	S20頃か	「東海大学」創設者。工学博士。
// 渡瀬 雅太郎	S20頃か	
// 渡瀬 三郎	S20頃か	
// 植村 甲午郎	S20頃か	

[典拠] 氏名欄は, 『河井手帳』貴S20中の「氏名」欄, より作成。

[備考] 河井は, S19.3.1, 「興農学園」理事。

表13. 河井弥八と関係する人物等 (xiii) - 「池之上国民学校会」(所在地, 世田谷区北沢2-73) -

氏名	年, 月, 日	備考
校長 岸上 京三	S20頃か	学校で甘藷増産をしたか。

[典拠] 氏名欄は, 『河井手帳』貴S20, 中の「氏名欄」, より作成。

[備考] 「池之上国民学校」は, 河井が居住する町内。

表14. 河井弥八と関係する人物等 (xiv) - 「東京指公会」(所在地, 渋谷区猿楽34, 徳川家公邸内) -

氏名	年, 月, 日	備考
理事長 橋本 圭三郎	S20頃か	貴族院議員。/ (表5参照)。

[典拠] 氏名欄は, 『河井手帳』貴S20, 中の「氏名欄」, より作成。

表15. 河井弥八と関係する人物等 (xv) - 「香邨寮同人会」(所在地, 神田区一橋通, 「如水会館」内) -

氏名	年, 月, 日	備考
江口 定條	S20頃か	貴族院議員。/ (表5参照)。
水野 梅暁	S20頃か	
工藤 蒙吉	S20頃か	

[典拠] 氏名欄は, 『河井手帳』貴S20, 中の「氏名欄」, より作成。

表16. 河井弥八と関係する人物等 (xvi) - 財団法人「晴光園療院」(所在地, 中野区江古田3-1180) -

氏名	年, 月, 日	備考
理事長 関屋 きぬ子	S20頃か	関屋貞三郎と同居所, 関屋貞三郎の妻か。
主事 山口 欽太郎	S20頃か	
// 志賀 信光	S20頃か	

[典拠] 氏名欄は, 『河井手帳』貴S20, 中の「氏名欄」, より作成。

## **A Study of Dai-Nippon Hotoku-sha's Activities for Increasing The Yield of Sweet Potatoes during and after the World War II**

—Based on an Analysis of the Diaries of Hosaku Maruyama and Yahachi Kawai—

Hisanori MAEDA

This study will try to clarify the actual circumstances of the activities for for increasing the yield of sweet potatoes led by Hosaku Maruyama, a lecturer, and Yahachi Kawai, vice president of Dai-Nippon Hotoku-sha, and examine the values of the activities.

It covers a period, which is from the mid war to March 31, Showa 25, when the control of sweet potatoes productions was abolished.

This paper is Part I of a two-parts on this subject.

Yahachi Kawai, who has careers of jijujicho ken kogogudaifu kizokuin giin and so on as well as vice president and president of “taisha”, promoted the increasing the yield of sweet potatoes nationwide by Maruyama-way mainly at the center of Japan, appealing its needs, and working on the key persons for those affairs.

This study focused on the following facts:

- (1) He grew up having been influenced by his father and grand father who had worked for keeping the stability of food supply and the wealth of society. These facts would be one of the reasons that led him to the activities of increasing yield the of sweet potatoes later.
- (2) He knew so many important people from various fields as to promote the way of sweet potato planting by Maruyama-way wide, such as people from his school, Enshugakuyukai (people from the same home town), people from the Imperial Households, people from kizokuin and people from social circles.

